

42483

教科書文庫

4
810
42-1941
200030
2125

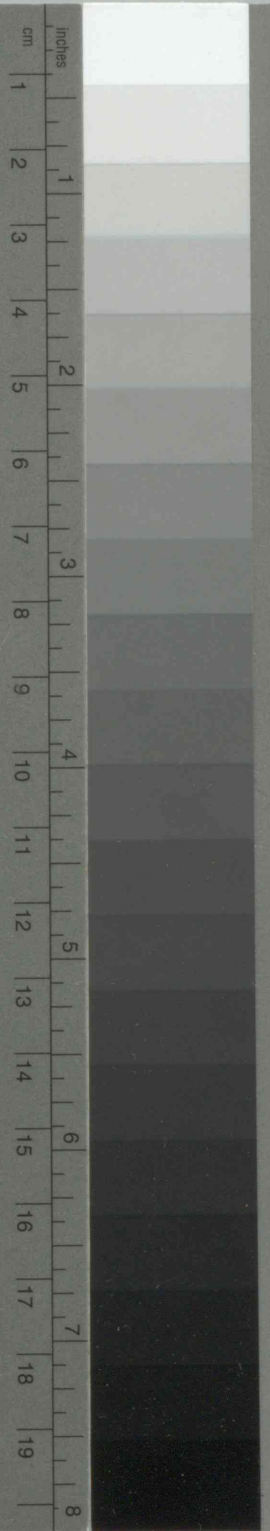
5.16

Kodak Gray Scale



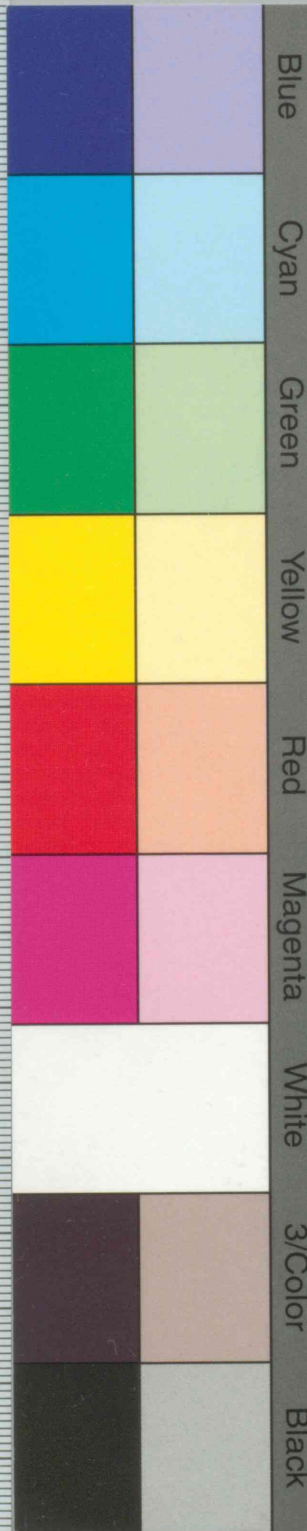
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Om15
資料室



3209
Om15

京都帝國大學
教授文學博士 澤瀉久孝
奈良女子高等
師範學校教授 木枝增一
共編

女子新國語讀本

新制版

文部省檢定濟

昭和十六年七月三十日
高等女學校國語科用

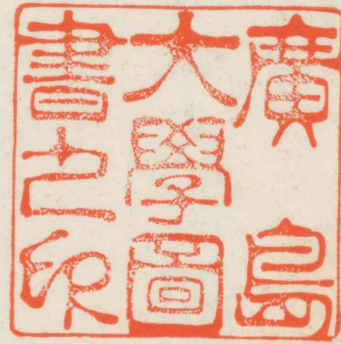
修文館發兌





(第四課参照)

松尾芭蕉



編纂の趣意

本書は、昭和十二年三月二十七日改正發布せられたる高等女學校國語科教授要目に則り、左の諸點に留意して編纂しました。

一 **國民精神の體得**—これに就いては、國體の精華國民の美風偉人の言行を敍し、特に日本女子としての特性を養ふに足る材料を選定しました。

二 **文學精神の涵養**—これに就いては、國文學の本質に基づき、時に於ては古今、形に於ては様式の種々相に互り、心情を優雅ならしむべき材料を選定しました。

三 **國語精神の把握**—これに就いては、各教材が總べて醇正なる國語に採つてあるのは勿論、更に國語の正しい相を認識せしむると同時に、國語愛護の念を培ふに足る特別なる材料を選定しました。

右三點の外、世界的情勢を知らしめて圓滿なる國民的常識を養成するに足るもの、女子の本務たる家庭生活の趣味を向上せしめるに足るものをも加へました。

昭和十二年七月

木 枝 増 一
澤 瀉 久 孝

目次 卷九

一	肇國の精神	清原 貞雄	一
二	水上	北原 白秋	二
三	言葉と國民性	佐久間 鼎	四
四	奥の細道	松尾 芭蕉	四
五	大晦日は合はぬ算用	井原 西鶴	五
六	反省する心	土居 光知	四
七	折節の移り變り	吉田 兼好	五
八	日野山の閑居	鴨 長明	五
九	山の文學と水の文學	久松 潜一	五
一〇	新島守	増 鏡	六
一一	大原御幸	平家物語	六

一三	平假名と女子	吉澤 義則	一〇〇
一四	中古短歌抄		一〇九
一五	歌謠抄		一七
一六	光頼卿參内	平治物語	一三
一七	そぶるごと	樋口 一葉	一三〇
一八	ドイツの婦人	小宮 豊隆	一四〇
一九	家	和辻 哲郎	一四九
二〇	婦人の教養としての國文學	藤村 作	一五九

附録

裝束・甲冑・武具圖鑑
日本文學年表

……終……



女子新國語讀本 新制版 卷九

清原貞雄

大分縣の人、國史
學者、廣島文理科
大學教授、明治十
八年(五三)生。

意識的に

一 肇國の精神

清原貞雄

世界に唯一にして二なき我が國體の完成に、最も密接なる
關係をもつて居るものは、我が肇國の精神である。國家は一
定の企圖の下に意識的に作つたものではないが、既に國家が
發生した以上、其の國民は之を出來得る限り善美ならしめ健
全ならしめんとするのは當然である。こゝに於て、肇國の精
神即ち國家に對する理想が現れるのである。此の肇國の精
神、此の理想に依つて、國家が發展する。肇國精神の價値は即

ち其の國の價值を定むる基本條件であると言はなければならぬ。

我が肇國當時に於ては未だ文字なく、従つて後世の如く其の思想を取纏めて發表する事は出来ない、又確實なる歴史事實も傳へられてゐない。然らば、何に依つて其の當時の國民の精神を窺ふ事が出来るかと云ふに、それは神話に依るのである。

神話は半ば思想上の産物であつて事件を如實に傳ふるものではないが、思想的産物であるだけに、其の理想其の精神等を知る資料としては、事件の記録よりも却つて高い價值をもつて居るのである。

此の神話に現れた所の肇國の精神の第一は、主權を立つる

に血統主義を以てする事である。即ち、萬世一系の皇統を以て永遠無窮に我が日本帝國の主權者として奉戴する事が肇國の當初からの國民の理想である。其の理想は、天孫降臨に際して天照大神の降し賜はつた神勅の中に、最も明白に現れて居る。

葦原千五百秋の瑞穗國はこれ我子孫の王たるべき地なり。
爾皇孫就いて治せ行矣。寶祚の隆えまさんこと天壤と窮なかるべし。

とあるのがそれである。あまつ日嗣、即ち天照大神の御子孫が、天壤のあらん限り永遠無窮に此の日本帝國に君臨し給ふべきものであるといふ肇國精神即ち國民的理想が、此の神勅の中に明白に現れて居るのである。帝國憲法第一條に、「大日

照應する

合議主義

歸順

淵源

聖德太子

用明天皇の第二皇子、厩戸皇子、豐聰耳皇子、上宮太子とも申す、推古天皇の皇太子にして攝政、推古天皇の二十九年（二六二）薨御、御年四十九。

本帝國は萬世一系の天皇之を統治す。とあるのは我が國體の根本義を示したのであるが、此の肇國の精神と相照應するものである。

第二は合議主義を以て政治の原則とする事である。天照大神が天岩戸に隠れました時に、八百萬の神々は天安河に會して其の處置を議した。又、天孫降臨に先だつて大國主命に歸順を説くにも八百萬神の群議に依つた。是實に我が憲法に依つて認められて居る所の議會政治の淵源である。聖德太子の制定せられた十七條の憲法の第十七條に、事は獨り斷ずべからず、必ず衆と共に謀つて行ふべきを示されたのも同じ精神である。我が國の議會政治が西洋から輸入せられて始めて起つたものであるかの如く考ふるは大なる誤で、遠

陣の座

徴士・貢士
專制獨斷
中世

くは肇國の精神に於ける衆議政治の理想を受け、中頃にしては聖德太子の十七條の憲法の精神を受け、近くは明治元年、五箇條の御誓文に「廣く會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ」とある精神を受けて居るのである。政治の實際の運用に就いて見るも、王朝時代に於て朝廷に必ず陣の座を開いて公卿一統の合議に依つて政治を行ひ、明治初年に於ても諸侯から徴士・貢士を召して意見を徴し給うたのであつて、決して專制獨斷の政治は行はれなかつた。只中世武家時代に於て專制政治が行はれたが、之は我が國體に悖る所の變態政治の行はれた時代の特相であつて、決して我が國の本來の姿ではないのである。

第三は樂天的努力主義である。東洋は諦め主義、隱退主義

老子 姓は李、名は耳、字は聃、支那周代の哲學者、「老子」の著者と傳ふ。

莊子 名は周、南華真人、南華老仙と稱す、支那戰國時代の學者、老子の説を祖述す、「莊子」の著者。

歡ぐ

あはれ、あな面白 古語拾遺に見え

古語拾遺、一卷、齋部廣成が自己の氏族の衰微をなげいて、事蹟を漢文に記し、平城天皇の大同二年（四四七）に、朝廷に獻した書。

である。と云はれて居る。佛教や支那の老子、莊子の思想には諦め主義的厭世思想があつて、其の影響を受けた後の我が國には幾分か斯かる傾向があつた事は否定し得ない所であるが、之は決して我が國民本來の精神ではない。天照大神が岩戸に隠れまして天下常闇とこやみになつた際にも、國民は決して失望落膽しなかつた。火を焚き、雞を鳴かしめ、歌ひ、踊り、神々の歡あそぎ笑ふ聲、高天原を搖動かしたとある。斯くて、天日再び輝き渡るや、八百萬の神々は聲を合はせて、「あはれ、あな面白、あなたのし、あなさやけ、をけ。」と囃した。如何なる場合にも物に屈托せず明かるく樂しき心を以て努力して運命を展開して行く、吾等の祖先の精神がよく現れて居る。肇國以來我が國は幾度か容易ならざる國難に際會しながらよく之に善處して誤

らなかつたのは、此の樂天的努力主義を以て國事に對した結果であつて、今日我が國民が諦め主義に傾いて不屈不撓の精神に乏しいといふ事が事實であるならば、吾等は吾等の祖先の精神に鑑みて大いに反省しなければならぬ。

第四は平和主義を以て國是とした事である。日清、日露の兩戰役に於て、我が國が我に數十倍の大國に打勝つたといふ理由に依つて、動もすれば日本國民を以て好戰國民なりとするものがあるのは、誣ふるも甚だしといはねばならぬ。何れの場合に於ても忍び得る限り忍んだ後、自衛上止むを得ずして遂に劍を執つて起つたのである。おとなしき人にあらずゆる侮辱と壓迫とを加へた結果、其の人が猛然として起つて不法者を膺懲した時に、其の不法者が其のおとなしい人を非

好戰國民 誣ふ

膺懲する

無名の師

難するやうなものであつて、世に是以上の不合理は無いてあらう。日本國民は決して好戰國民ではなく、従つて、平和主義が肇國精神である。多くの國々の神話は、大抵戦争の物語である。然るに、我が國の神話には戦争の物語は殆ど無い。古代二大勢力であつたと思はれる天孫民族と出雲民族との併合は戦争の結果行はれたのではなくして、平和的妥協の結果行はれたのである。上代最も有力且高德なる主權者として國民崇敬の的であつた天照大神が女性にましました事も、平和を以て國是とした事を示して居る。素戔嗚尊の亂暴に對しては一旦天岩窟に隠れて争を避け給うた事も同じ精神の現れである。其の後の歴史に就いて見るも、止むを得ざる時の外、無名の師を起した事は無いのである。

無抵抗主義

祈年祭

現在は二月四日、年穀の豊饒・天皇の御安泰・國家の安寧を祈請する祭典、伊勢の神宮に勅使を發遣せられ、十七日に大祭を執行せられる。昔は神祇官で國司から集めた白猪・白雉などを供物に捧げて行はれた。

履みさくむ

平和を愛するからといつても、所謂無抵抗主義や柔弱ではない、一面に於ては武を尙ぶの國である。武を尙ぶ事は平和を愛する事と矛盾するものではない。
第五は發展主義を以て國是として居る事である。此の精神は祈年祭としひのまつりに當つて天照大神に捧ぐる祝詞のりことの中に最もよく現れて居る。此の祝詞の作成せられた時期は明確でないが、我が國の祝詞の中では最も古いものの一とせられて居る。
皇神すまみかみの見霽みはらします四方よもの國は天の壁立かきたつ極み、國の退そき立つ限り、青雲の靄あやみく極み、白雲の墜坐おち向伏むかふす限り、青海原あまのうらは棹さし柁かぢ干ほさず、舟の艦かぢの至り留る極み、大海原あまのうらに舟滿ちつ々けて、陸くわより往道ゆくみちは荷にの緒縛ゆわひ堅かたて磐根木根いはね履かみさくみて、馬の爪つめの至り留る限り、長道間ながみちなく立ちつ々けて、狭さき國くには廣く、

冥助

悦服す

日出づる國

清原貞雄著、我が國の長所を國民に理解せしめ、國民的自覺を促さんとするもの、昭和四年(一九二九年)三月十日刊行。

峻しき國は平けく、遠き國は八十綱打掛けて引寄する事の如く、皇大御神の寄さしまつらば、云々。
とあるのがそれである。國民舉つて崇敬し、其の冥助に依つて我が國民の幸福が保持し増進せらるゝと信ずる所の天照大神に祈り、其の神祐の下に、海も陸も見渡す限り、世界の果まで、我が國に悦服すべきものであるといふ國民的大抱負を現して居るのである。
以上の五項は何れも我が肇國の精神として根本的のものであつて、後繼者たる吾等國民の永遠無窮に喪失してはならないものである。

(日出づる國)

北原白秋

名は隆吉、福岡縣の人、詩人、歌人、明治十八年(一八八五年)生。

鏡葉
湯津真椿
真洞なす

神處
言問ふ

二水 上

北原白秋

水上は思ふべきかな。

苔清水湧きしたたり、

日の光透きしたたり、

樞、馬酔木、枝さし蔽ひ、

鏡葉の湯津真椿の真洞なす

水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。

山の氣の神處の澄み、

岩が根の言問ひ止み、

二水

上

二

荒魂
神魂び

ことごと

二水
上

かいかがむ荒素膚の
荒魂の神魂び神つどへる
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。

雲、狭霧、立ちはばかり、
丹の雉子立ちはばかり、
白き猪の横伏し喘ぎ、
毛の荒物のことごと道塞ぎ寝る
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。

三

うづ
を
みてぐら

とよむ
たぎつ
うろくづ
たまきはる
湯津石村
海豹と雲
北原白秋著、詩集、
昭和四年(三五八)八
月刊行。

二水
上

清清に湧きしたたり、
いやさやに透きしたたり、
神ながら神寂び古る
うづのをを、うづの幣帛の緒の鎮もる
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。

青水沫とよみたぎち、
うろくづの堰かれたぎち、
たまきはる命の渦の
渦卷の湯津石村をとどろき揺る
水上は思ふべきかな。

海豹と雲

三

佐久間 鼎
東京市の人、心理
學者、文學博士、九
州帝國大學教授、
明治二十一年(西
心)生。

三 言葉と國民性

佐久間 鼎

三角形内角の和は二直角
百四十四つに割れば三十五

かうした文句も確に或思考の内容を言葉によつて表現してゐる。さうして、外觀上、俳句に見られるやうな一種の形式は備つてゐる。ところで、これを

丈六に

芭蕉の句。

さみだれや

燕村の句。

丈六にかげろふ高し石の上

さみだれや大河を前に家二軒

といふやうな語句と比べてみるとどうであらう。

幾何學の命題は、イギリスの言葉でも、ドイツの言葉でも、まさしく同一の事柄を表現することができる。正確に定義さ

命題

術語

定理

過不及なく

トライアングル

「三角形」の意、英語

單語

れた術語を以て、一つの定理を過不及なく表現することが可能でもある、必要でもある。三角形といふ代りに、例へばトライアングルといふ單語を用ひたところで、或は、全體の文句を外國語に引直してしまつたところで、その意味内容には何等の増減もない。そこが幾何學の幾何學たる所以で、一般に事理の解明を目指す科學の陳述は何等自由解釋の餘地を残さない。ちやうどそれだけのことを言ひ表して、それ以上にも、それ以下にもならないやうなものたることを理想とし、目標とする。ところが、言葉といふものは、元來さういふ役目を帯びて生まれて來たものではない。そこで、科學者にとつては、種々不都合な點があつて、これを不用意に用ひる場合には、思想上の混亂をも惹起するおそれが多分にある。この點は所

惹起する

符號

謂論理的に整つた言語といはれるドイツ語などに就いても
ほゞ同様で、その爲に學者はその用語に對して、かなり慎重な
態度を以て臨むことを要求される。このやうな場合に、むし
ろ言葉と言葉との連接によるよりも、別に嚴密に定義した符
號を用ひる方が正確に行くといふところから、さういふ仕方
を採用する向もあるほどである。

概念的思惟

ところが一方ではこれと正反對の言葉の用ひ方が行はれ
てゐて、そこでは極めて豊富な内容を——單に概念的思惟で
はなく、實感的暗示をごく簡単な語句によつて提示する。
その最も典型的な一つの實例を、私達は、前に例示した我が國
特有の短詩形たる俳句に見ることが出来る。こゝに表現さ
れた内容を、何れかの外國語に移してみようと思つても、それ

直譯

逐語譯

文化的背景

事態
識具體的認

は到底不可能なことが分かる。勿論、直譯はし得よう。しか
したゞ逐語譯をしたものは、實は原文に對して殆ど没交渉で
さへある。こゝに國語の純粹に日本的なものがあり、民族的
精神、文化的背景をはなれ得ない所以が看取されるのである。
西洋の言葉にも、「行間を讀む」といふことがあり、まともに語
句によつて言ひ表されてゐない意味をも汲取ることが、眞の
理解、全的解釋の爲には必要だとされてゐる。一個の文章が、
その辭書的及び文法的な理解によるだけでは、十分に分かつ
たといふことが出来ないのも、全くこの故である。一般に、具
體的な言葉に就いていへば、その文句が、どういふ場合に、どう
いふ發言の事態に臨んで、どういふ地位に於て述べられたか
等に就いての具體的認識がなくては、その文法の構造や語句

代行者
就中
全面的事態

の意味は知られてゐても、本當の意味、發言した人の意圖してゐることが分からず、言葉の眞の役目は果されないてしまふ。この發言の事態は、本來人間の社會生活に於ける種々の日常の場面に於て現れるものであるから、科學上の事項、例へば幾何學の定理を述べるといふやうな、純粹に理知的な客觀的な事理を傳達する場合とは違ふ。もと／＼言語はこの社會生活の世界、即ち「世間」の爲に、その中から發生し成長したもので、その本來の使命は、日常生活の具體的場面に於て、行動の一節として、またその誘發者として、またその代行者として、實質的な生活意義を帯びて用ひられるところにあるので、生々した現實の生活に即して始めて理解され、就中、それ／＼の具體的場面に於ける全面的事態のなかに、その適切なはまりどこ

活殺自在
破局
解消する
呈露する
片言隻句
額面價格

ろをもつてゐるわけである。かうした現實的一幕一場に於て語られる語句は、一言一句、拔差ならぬ實質的な活殺自在の意義をもつて来る。イエスカノオカ、その一語の相違によつて全く異なる反應が現れる。一つの緊張しきつた場面に於ては、音聲に於ける僅かの差異が遂に事件の破局を將來することともあらうし、緊張をきはどく解消して圓滿な解決に導くこともあらう。

既に言語が一弛一張の生活行動の一節々々であり、情意活動の種々相を呈露するものである以上、片言隻句も全く感情を離れて、「無表情」に語られることはないといつてよからう。又、その額面價格だけで受取られるやうな、含蓄のない、或は割引なしのものではあるまい。かうして具體的な言語は、一面

生活感情
多角性

言語活動

思想體系

非合理性

生活感情の如實の發露たると共に、他面社會生活の多角性に適應して幾多の虚實を含む、對人的武器ともなつてゐる次第である。實人生はかうした言語の活動を一つの運轉動力として進行して行く。こゝに言語活動の眞の力量と效用とが存し、言語の本領が看取される。かういふ風に言語には合理的・理論的な一面があると同時に、非合理的情意的な他の一面が備はつてゐる。實際の生活に於て、理知だけで、無感情に生活するといふことは、殆ど考へられない。言語は、思想を傳達し、感情を表白するといはれるが、思想體系の發展に對して、言語が極めて重大な寄與をしてゐる事實を十分認めなければならぬ。一方に、言語自體が非合理性を含むことも見遺してはならない。寧ろこの非合理的なものの中にこそ民族的

濾過する

禪家

柳は綠花は紅

描破する

人間味

飽和する

脱俗

寒巖枯木

梅が香・荒海・野ざらし

三句とも芭蕉の句。

なものがあり、親しみ暖みを感じさせるものがあるのである。日常言語に於ける描寫は、所謂見たまゝ、聞いたまゝの客觀の相にしても、それは見聞する人の眼と耳とを濾過したもので、おまけにその人の匂と味とが加へられてゐる。これが禪家の所謂「柳は綠花は紅」の世界であり、日常人にとつては唯一の世界である。畫家が寫生して、十分の生彩をもつて描き出さうとするのも、この世界の光景であり、俳句の描破する情趣もまたこの世界の具體的な風光である。客觀的といひ、寫實的といふも、そこに十分に人間味が飽和されてゐるのでなく、てはならない。脱俗とはいふが、まつたくの寒巖枯木となつてしまつて、人間たることをやめるといふのではない。

梅が香にのつと日の出る山路かな

のつと

野ざらし
心にしむ

自然觀照
髣髴たらしめる

質的な

昇華する

荒海や佐渡に横たふ天の河

野ざらしを心に風のしむ身かな

その自然は、それ／＼情趣を呈し、種々の相好をそなへてゐる。そこに感じられる氣分情調は、自然觀照の體驗を髣髴たらしめるもので、その淡くてしかも深い味は、脈々として盡きないものがある。この境地にあつては、數字さへも單に數量的なもののみでなく、何等か深い感銘を與へるやうな質的なものを含蓄してゐるのである。子規の句にこんなものがある。

三十六坊一坊残る秋の風

病人に八十五度の残暑かな

三千の俳句を閲し柿二つ

悲痛の體驗を昇華しつくして、一脈の「さび」の境涯に安住の

比倫を絶する
體參する

シエクスピア

イギリスの大文豪、詩人、劇作家、
西暦一六〇六年及一六五
五十三

普及する

元祿の俳人

芭蕉及びその門人
達をさす。

天明の俳人

蕪村及び蕪村を中
心とする諸俳家を
さす。

日本精神の發揚と

國語教育

雑誌教育・國語教
育の臨時號、日本
文化開明の基礎工
作として國語教育
はいつかあるべき
かにつき諸家の論
策を集めたもの、
昭和九年（三五）四
月刊行。

地を見出した芭蕉の俳句等に至つては、もはや比倫を絶した
独自の藝術で、これを味解するものもまたこの心境に體參し
得るところの限られた人達である。かうした特色ある境地
が我が國人以外の文化社會人によつて到達し得るといふこ
とは殆ど期待出来ない。シエクスピアの本當の味はひが日
本人に分からないといふ以上に、西洋人にとつては俳句の趣
は感得しがたいものであらう。併し、日本人にとつては、勿論
性向趣味にもよるが、この風趣を味はふといふことがそれほ
ど困難ではない、寧ろ最も普及してゐる文藝として俳句など
が挙げられ、理解の深淺はあるにしても、元祿や天明の俳人の
句境が、今日尙多數の人達の同感共鳴を勝ち得るといふのは、
誠に等しく日本人なればこそその感を禁じ得ないものがある。

〔日本精神の發揚と國語教育所收の論文に據る〕

松尾芭蕉

松尾宗房、伊賀國
三重縣の人、俳
人、蕉風の祖、元祿
七年(三五)歿、年
五十一。

四奥の細道

松尾芭蕉

一首 途

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。船
の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日々
旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。予も、い
づれの年よりか、片雲の風に誘はれて漂泊の思やまず。海濱
にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を掃ひて、やゝ
年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關越えんと、そゞろ神のも
のにつきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取る物手につ
かず。股引の破れを綴り、笠の緒つけかへて、三里に灸する

去 年

元祿元年(三四)。

白河の關

創置の年代不明、
址は今、岩代國(福
島縣)西白河郡古
關村大字旅宿の南
方關山にある。

道祖神
三里

杉 風

通稱鯉屋市兵衛、
蕪門、享保十七年
(三五)歿、年八十
六。

別 墅

江戸(東京市)深川
六間堀にあつた。

彌生も末の七日

元祿二年(三四)三
月二十七日。

月は有明にて

月は有明にて光を
さまれるものか
ら、かげさやかに
見えて。(源氏物語
「帯木巻」)

上 野

今東京市下谷區、
上野公園のあると
ころ。

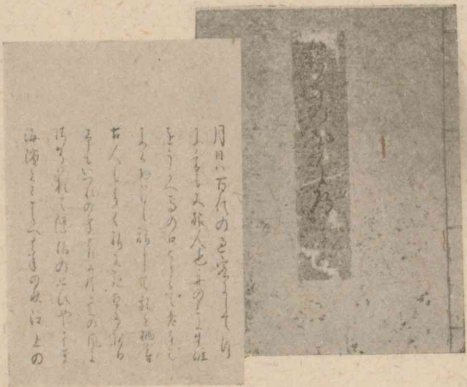
谷 中

上野の西北。

千 住

今の東京市足立區
千住町。

より、松島の月先づ心にかゝりて、住める方は人に譲り、杉風が
別墅に移る。

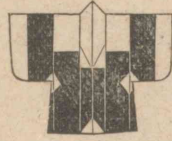


本 刊 道 細 の 奥

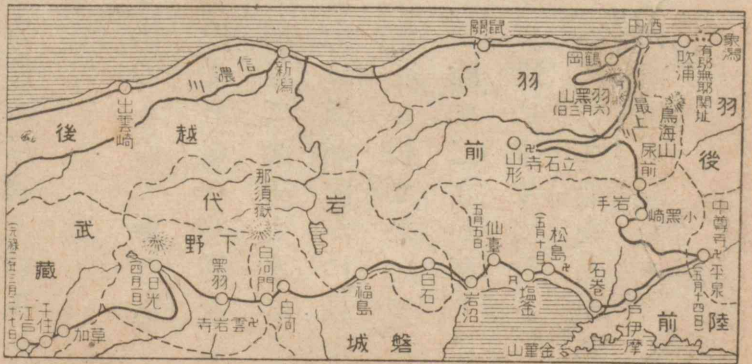
草の戸も住替る代ぞ雛の家
彌生も末の七日、曙の空朧々と
して、月は有明にて光をさまれる
ものから、富士の嶺かすかに見え
て、上野谷中の花の梢またいつか
はと心細し。陸まじきかぎりは
宵より集ひて、船に乗りて送る。
千住といふ所にて船をあがれ
行く春や鳥啼き魚の眼は涙

吳天に
吳・楚は支那の昔
の國名、都から遠
い、吳天は遠い旅
の空の意。

草加
武藏國埼玉縣北
足立郡、今の草加
町、奥州街道の第
二宿驛にあたる。



これを矢立の初として、行く道なほ
進まず。人々は途中に立並びて、後影
の見ゆるまではと見送るなるべし。
今年元祿二年にや、奥羽長途の行脚
たゞ假初に思ひ立ちて、吳天に白髪の
恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ
目に見ぬ境、若し生きて歸らばと、さだ
めなき頼みの末をかけ、其の日漸く草
加といふ宿に辿り著きにけり。瘦骨
の肩にかゝれるもの先づ苦しむ。唯
身すがらにと出て立ち侍るを、紙子一
衣は夜の防ぎ、浴衣、雨具、墨筆の類ある



さり難し
わりなし
いかで都へ

たよりあらばいか
で都へつげやら
ん今日白河の關は
越えぬと、(平兼盛
拾遺集)

三 關

念珠・白河・勿來を
東國の三關とい
ふ。

風騷の人
秋風を耳に
都をば霞とともに
立ちしかど秋風ぞ
吹く白河の關
(能因一後拾遺集)

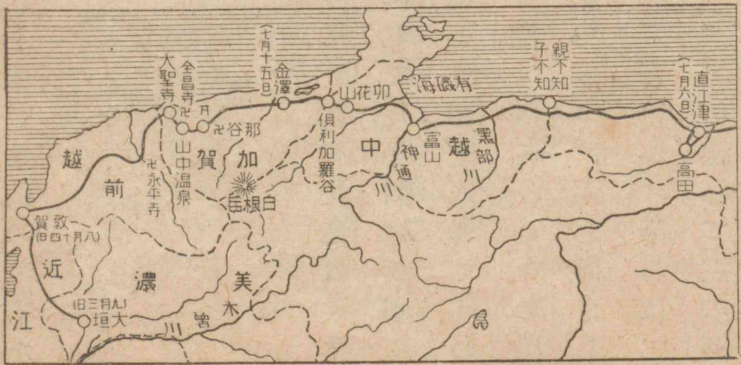
紅葉を佛に
都にはまだ青葉に
て見しかども紅葉
葉ちりしく白河の
關 (源頼政一干載
集)

雪にも越ゆる
東路も年も末にや
なりぬらむ雪ふり
にける白河の關
(僧都印性一干載
集)

は、さり難き餞などしたるは、さすがに
打捨てがたくて、路次の煩となれるこ
そわりなけれ。

二 白河の關

心もとなき日數かさなるまゝに、白
河の關にかゝりて旅心さだまりぬ。
いかで都へと便求めしも理なり。中
にも此の關は三關の一にして、風騷の
人心をとむ。秋風を耳に残し、紅葉
を佛にして、青葉の梢なほあはれなり。
卯の花の白妙に、茨の花の咲きそひて、



清輔の筆
藤原清輔の著、
草紙一（歌學隨筆）
集、清輔は二條天皇の御代の歌人、
歌學者、治承元年（一一三〇）卒、年七十

會良

芭蕉の門人、河合會良、此の旅行の同伴者である、寶永七年（一七三〇）歿、年六十二

松島

陸前國（宮城縣）宮城郡

好庭風

支那湖南省北部にある大湖

西湖

支那浙江省に在る

浙江

支那浙江省に在る、一名錢塘江、海潮の奇を以て知られてゐる



松島

雪にも越ゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改めし事など、清輔の筆にもとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着かな

三 松島

抑ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭西湖に恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡くして、欵つものは天を指さし、伏すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左に別

大山祇

諸・册二神の御子、木花開耶姬の父

雄島が磯

瑞巖寺の西南にある

雲居禪師

瑞巖寺中興の僧、萬治二年（一三三九）寂、年七十八

別室のあと

把不住軒といつた

れ、右に連なる。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するがごとし。千早振る神の昔、大山祇のなせる業にや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ詞を盡くさん。

雄島が磯は地つゞきて海に出でたる島なり。雲居禪師の

別室のあと、坐禪石などあり。はた、松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見え侍りて、落穂松笠など打煙りたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、先づ懐かしく立寄る程に、月海に映りて晝の眺また改む。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ怪しきまで妙なる心地はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす

會良

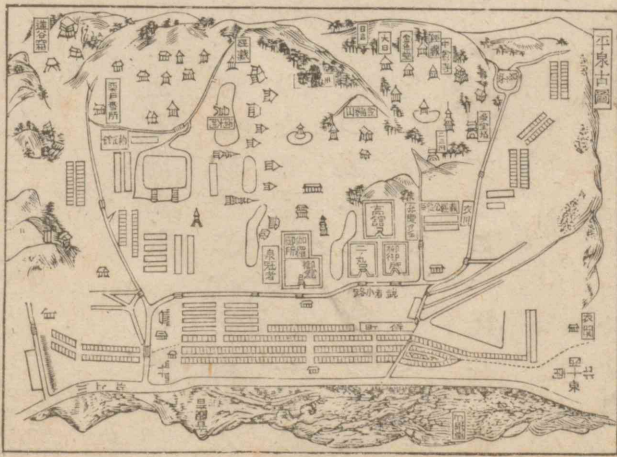
雉 兔
芻 蕘
黄金花咲く
すめろぎの御代榮
えむとあづまな
るみちのく山にく
がね花さく。(大伴
家持一萬葉集)



廻船

四 平 泉

十二日平泉へと志す。姉齒
の松、緒絶の橋など聞傳へて、人
跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道
そこともわかず、終に道ふみ違
へて、石の巻といふ湊に出づ。
「黄金花咲く」と詠みて奉りたる
金華山海上に見渡され、數百の
廻船入江に集ひ、人家地を争ひ
て竈の煙立ちつゞきたり。思
ひかけずかゝる處にも來れる
かなと、宿からんとすれど、更に宿かす人もなし。漸く貧しき



平泉古圖

三代 藤原清衡・基衡・秀
衡が跡
平泉館(伽羅御所)
址、平泉驛の東北
金鶏山 秀衡の作つた平泉
鎮護の山、形を富
士山に擬し、雌雄の
金鶏を山上に埋め
高館 衣川館、義經の館
平泉驛から北六
丁、泉が城
秀衡の三男泉三郎
忠衡の館
泰衡等が舊跡
所、南に接し、伽羅御
所、泰衡は次衡の
次男、泰衡は次衡の
陸奥押領使となつ
衣が關 平泉全盛に設けら
れた新關、今は柴
田郡白鳥村にな



金色堂の内部

大河なり。衣川は泉が城を繞りて、高館の下にて大河に落入

小家に一夜を明かして、あくれば又知らぬ道迷ひ行く。袖の

渡尾駝の牧眞野の萱原などよ
そめに見て、遙なる堤を行く。
心細き長沼にそうて、戸伊摩と
いふ處に一泊して平泉に到る。
其の間二十餘里ほどとおぼゆ
三代の榮耀一睡の中にして、
大門の跡は一里此方にある。
秀衡が跡は田野になりて、金鶏
山のみ形を残す。まづ高館に
上れば、北上川南部より流る、

花の上漕ぐ、
きさぶがたの櫻は波
にうづもれて花の
上こぐあまのつり
舟。

干満珠寺
今の蛸満寺。

むや／＼の關
有耶無耶關、今丁
度秋田縣と山形縣
との境にある。

汐越
羽後國(秋田縣)由
利郡

西施
支那春秋時代、吳
王の寵姫、西子と
も書く。

奥の細道
芭蕉が門人曾良と
共に元禄二年三月
から九月にかけて約
百五十日、奥羽北
陸の諸國を廻つて
(岐阜縣)に入り更
に伊勢に立つまで
道程約六百里の作
文紀行、元禄七年
(三三三)刊行。

漕ぐと詠まれし櫻の老木、西行法師の記念をのこす。寺を干満珠寺といふ。此の寺の方丈に坐して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさへ、其の影映りて江にあり。西はむや／＼の關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙に、海北に構へて浪打入るゝ處を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、おもかげ松島に通ひて又異なり。松島は笑ふが如く、象潟はうらむが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

象潟や雨に西施がねぶの花

(奥の細道)

井原西鶴

本名平山藤五といふ説がある、大阪の人、江戸時代の浮世草子作家、俳人、元禄六年(三三三)歿、年五十二。



やま草



神田の明神

今の東京市神田區。

内儀

五 大晦日は合はぬ算用

井原 西鶴

榎搗栗神の松やま草の賣聲も忙しく、餅搗く宿の隣に煤も拂はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞘の反をかへして、春まで待てといふに是非に待たぬか。と、米屋の若い者を睨みつけて、直なる世を横に渡る男あり。名は原田内助と申して、かくれもなき浪人、廣き江戸にさへ住みかね、この四五年品川の邊に店借りて、朝の薪に事を缺き、夕の油火をも見ず、これは悲しき年の暮に、女房の兄、半井清庵と申して、神田の明神の横町に薬師あり、この許へ無心の状を遣はしけるに、度々迷惑ながら見捨難く、金子十兩包みて、上書に「貧病の妙薬金用丸萬づに吉」と記して、内儀の方へ送られける。

五 大晦日は合はぬ算用

三

合力
あやか
軽口

千秋樂
雅樂の曲の名、こ
こは終宴の謠の義
であらう。

内助喜び、日頃別して語る浪人仲間へ、酒一つ盛らんと呼びに遣はし、幸ひ雪の夜の面白さ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、「さあこれへ」といふ。以上七人の客、いづれも紙子の袖を連れ、時ならぬ一重羽織、どこやら昔を忘れず、常の禮儀過ぎてから、亭主の罷り出て、「私仕合はせの合力を請けて、思ひのまの正月を仕る。」と申せば各、それはあやかりもの。「といふ。「それにつき上書に一作あり。」と、件の小判を出せば、「さても軽口なる御事。」と見てまはせば、盃も數重なりて、「よい年忘れ、殊に長坐。」と千秋樂を謳ひ出し、「小判も先づ御仕舞ひ候へ。」と集むるに、十兩ありしうち一兩足らず。座中居直り、袖などふるひ、前後を見れども、いよ／＼無いに極まりける。

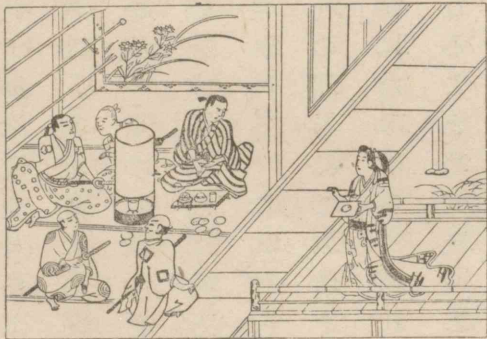
主人の申すは、「その内一兩はさる方へ拂ひしに、拙者の覚え

めいよう
身晴
澁面

因果なり

徳乗

刀劍師後藤徳乗、
名は光次、寛永八
年(三三)没、年八
十二。
唐物屋



(大下馬挿畫) 大晦日は合はぬ算用

違。」といふ。「只今までたしか十兩見えしに、めいようの事ぞかし。とかくは銘々の身晴」と、上座から帯を解けば、その次も檢

めける。三人めにありし男、澁面つくりて物をも言はざりしが、膝立て直し、「浮世にはかゝる難儀もあるものかな。某は身ふるふまでもなし。金子一兩持ちあはすこそ因果なれ。思ひも寄らぬ事に一命を棄つる。」と、思ひ切つて申せば、一座口を揃へて、「こなたに限らず、あさましき身なれ

ばとて、小判一兩持つまじきものにもあらず。」と申す。「如何にも此の金子の出所は、私持來りたる徳乗の小柄、唐物屋十左衛

内證

ひたもの

門方へ一兩二歩に昨日賣る事紛れはなけれども、折節悪し。常々談り合はせたる好誼すじみには、生害に及びし後にて御尋ね遊ばし、屍の恥をせめては頼む。と申しもあへず、革柄に手を懸くる時、小判は是にあり。と、丸行燈の陰より投出せば、さてはと事を鎮め、ものには念を入れたるが良い。といふ時、内證より内儀聲を立て、小判は此方このほうへ参つた。と、重箱の蓋に著けて座敷へ出されける。これは宵に山の芋の煮染物を入れて出されしが、その湯氣にて取著きける、然もあるべし。これでは小判十一兩になりける。何れも申されしは、この金子、ひたもの數多くなることめてたし。といふ。

亭主申すは、九兩の小判十兩の詮議するに十一兩になる事、座中金子を持ちあはせられ、最前の難儀を救はんために御出

おほげば
大下馬
五冊、「西鶴諸國はなし」ともいふ、諸國の珍説・怪談をあつめて三十五篇の短篇小説としたもの、貞享二年(一七二五)刊行。

しありしは疑無し。この一兩、我が方に納むべきやうなし、御主へ返したし。と聞くに、誰返事の時もなく、一座異なるものとなりて、夜更け雞も鳴く時なれども、各立ちかねられしに、この上は、亭主が所存のとほりに遊ばされて給はれ。と願ひしに、とかくあるじの心任せに。と申されければ、彼の小判を一升しやう耕に入れて庭の手水鉢の上に置きて、どなたにても、この金子の主取らせられて、御歸りたまはれ。と、御客一人宛立たせまして、一度一度戸をさしこめて、七人を七度ななたびに出して、その後、内助は手燭てんくともして見るに、誰とも知れず取つて歸りぬ。あるじ即座の分別、座馴れたる客のしこなし、かれこれ武士のつき合ひ格別ぞかし。

(天下馬)

土居光知

高知縣の人、英文學者、東北帝國大學教授、明治十九年(一八八六)生。

萬葉集

二十卷、撰者未詳、我國最古の歌集、仁德天皇から淳仁天皇の天平寶字三年(七三二)まで約四百五十年間、歌約四千五百首が収められている。

古今集

一九頁参照。

個體的

典型的

構成的表現

反省的表現

自我的表現

連續的表現

紫式部日記

二卷、紫式部が上東門院に宮仕した時の見聞・感想した記録、寛弘五年(一〇三三)秋より同七年(一〇三五)正月に至る。

六 反省する心

土居 光知

萬葉集と古今集との比較によつて、平安朝の初に於て、興味の中心が刹那から連續へ、個體的から典型的へ移りつゝあつたこと、反省する心が目ざめて實感の率直な告白から想像力による構成的表現の力を得つゝあつたことが察せられる。當時の人々が日記をつけたことは、彼等が始めて反省的になり、自我を連續の相のもとに見出さんとしたが爲であらう。日記は現存せるものの他にもあつたことは、紫式部日記及びその他の日記を綜合して作つたらしい榮華物語によつても推察される。また光源氏が須磨に於て繪日記をつけ、紫の上も「わが御有様を日記のやうに書き給へり。」などある句から

榮華物語

四十卷、系圖一卷、藤原道長の榮華を主とした編年體的國文歴史物語、所載の年紀は宇多天皇治六年(七五三)から河上天皇の寛治六年(一一五三)に至る百八十四年間に、巻毎に物語らしき題名あり、著者未詳。

光源氏

源氏物語の主人公、紫の上はその妻。

須磨

光源氏の謫せられたところ、繪日記をつける事は、明石の巻に見える。

紫の上

源氏物語明石の巻に見え。

教養

徒然わぶ

三人稱

回顧的

蜻蛉日記

三卷、右大将道綱の母(藤原兼家の室)の著、天曆八年(一〇二四)より天延

も、日記をつけることが、教養あり、徒然わぶる當時の人々の常であつたやうに想像される。かゝる日記は、多くは三人稱で書かれ、表現も回顧的である。蜻蛉更級和泉式部日記等は和歌が中心であつて、他の部分は後に歌が作られた事情を想ひ出して敘述したと考へらるゝ節が多い。蜻蛉日記の後半は短篇小説に近づいてゐる。伊勢物語は在五中將日記と稱せられ、和泉式部日記は和泉式部物語とも稱せられた。平安朝の日記文學は抒情詩と物語との中間に位するものである。自己の生活を反省し、その抒情的に高潮した刹那刹那を聯結して表現し、連續の相のもとに人生を觀照する態度は、更に自由に想像力を働かせて人生を描かんとする態度に進みゆくのが自然である。

二年(三三)に至る
傳的物語
更(ま)しむる日記
一卷、菅原孝標女
著、寛仁四年(二六
〇)より康平元年(二
七〇)までの約四十
年間の追記
和泉式部日記
一卷、和泉式部著
といはれる、第三
人称で、著者の長
保五年(二六三)より
聖寛弘元年(一〇三
三)までの生活の追
記
伊勢物語
在五中將物語とも
いふ、二卷、作者、
成立年代未詳、主
として在原業平の
行跡を記した歌物
抒情詩
観照する
主觀的
超主觀的なもの
必然的展開
御衣がち

物語は「汝」と「我」との関係の推移を内容とする。記紀は外なる世界の歴史であり、萬葉集は内なる世界の刹那の告白であり、物語は心の世界の歴史である。平安朝の女詩人は、かの年代史的な外面的歴史を軽んじ、心情の歴史を重んじた。この自覺が源氏物語を産んだ。

しかし、紫式部の考へた心の世界の價値は、餘りに主觀的であつて、未だ超主觀的なものを知らなかつた。そこには心情の推移が興味を中心になつてゐる。心情の必然的展開といふことは未だ自覺に上つてゐなかつた。奈良朝以後、人々は、狭い主觀の世界に閉籠り、平安朝の貴族は權勢や官位を得んとする運動と、歌舞遊樂の生活以外に爲すことなく、殊に上流の婦人は「御衣がち」に几帳の後に坐し、世間的な經驗を殆ど持

たなかつたのである。精神の成長は、主觀と超主觀的なものとの親密な交渉が保たれ、絶えず後者が内化されることによつて可能になる。主觀に閉籠つた人々は、道德的意識も臃げであり、未だ成長する個性ではなかつた。展開なき連續は弛緩倦怠分裂に終る。連續的な姿にせんとすれば却つて不徹底な、なまぬるい表現になることを感じた人々は、刹那の潑刺たる印象をそのままに書きつけた。それは枕草子、徒然草の如き隨筆文學である。

萬葉集と徒然草とを比較するに、前者には素樸な純一さがあり、後者には複雑を通過した簡潔さがある。前者は刹那に生きた人々の表現であり、後者は連續の世界の分裂した刹那に集中した人の表現である。和歌に於ても、古今集以後の典

枕草子
清少納言著、隨筆、
三〇一段から成つ
てゐる、長保二年
(二六〇)以後の作。
徒然草
五四頁参照。

新古今集

一一四頁参照。

感傷的

縣步行

堂上貴族

蒙昧

心酔する

私有する

圏外

型的趣味を超えて、再び印象的な、敘景的な表現に赴いた新古今集の新鮮味は、同一の傾向から生まれたものであらう。

奈良朝の歌人は純樸であつたが、平安朝の文學者は感傷的になつた。平安朝の優秀な作家は皆、あがたありき縣歩行の國守か、その子女であつて、地方の素樸な生活に接觸し、それと堂上貴族の浮華な生活とを對照して眺め得る位置にあつた。彼等は地方人の蒙昧のうちにある時は都に憧れたであらうが、宮仕をするに及んでは、外面の光彩に心酔することなく、絶えず反省を促されたのであらう。藤原氏に私有された文明は、制限された極めて狭苦しいものであつて、貴族生活を讚美することなくしてはその中に迎へ入れらるゝことなく、一言の非難も彼等をその圏外に放逐したであらう。されば、彼等の言葉は婉

優柔不斷

人道的熱誠
加持

曲をきはめ、思ふことを臆にうちかすめ、人生の批評を言葉の奥深く秘めなければならなかつた。彼等は主觀的でありながら主觀を直截に表現し得なかつた。かくて文章のリズムは低く、細やかな調子となり、その表現は不徹底になつた。源氏物語に表現された世界は、永遠の黄昏の沈滞した空氣が垂れ籠め、人々が優柔不斷である。平安朝の文明は裝飾の要素が多く、外面の華美によつて内部の貧弱を補はうとしてゐた。貴族等は唯享樂の日の永遠に連續せんことを希ふのみで、展開は恐しいことであつたらう。當時の佛教は國々に國分寺を建てた奈良朝の人道的熱誠なく、個人の壽福を祈る加持祈禱教となり、寺院法會僧侶讀經等は皆貴族の官能を喜ばすために裝飾化された。疫病ものへの怖に惱み、享樂の生活に

貫之

平安朝時代の歌人、古今集の撰者、天慶九年(八二八)卒、年六十五。

諧謔

紫式部

藤原爲時の女、藤原宣孝に嫁す、宣孝の死後上東門院に仕ふ、長和五年(八七五)歿、年三十九。(歿年、年齢は一説)

よつて無氣力にされた當時の人生には、奈良朝の晴朝は影も留めてゐない。當時の秀でた人々にはこの不徹底さを逃れんとする希望が早くから動いてゐた。貫之は諧謔と典型美とによつて悲哀を忘れようとしてゐるが、蜻蛉日記の著者は當時の婦人の苦悶をかなり深刻に表現した。和泉式部は宮仕の浮沈多き生活と僧庵の静かな生活との對照を夢のやうに感じた。紫式部は美的生活に對する興味と冥想の傾向とを有し、始は前の傾向に従つて現實と理想とを調和せんとしたが、晩年には後の傾向に従つたやうである。主觀に生きることは、その奥に超主觀的なものを見出すのでなければ、唯自己の世界を狭めるのみである。更級日記の著者は、物語と幻想とのうちに生き、夢と現實との區別もなかつた。夢が賣買

沈滯 彌縫 糜爛 西行

俗稱佐藤義清、歌僧、建久元年(八二八)歿、年七十三。

長明 世紀末

五八頁參照。アンヌイ

「倦怠」つれづれの意、フランス語。中宮

されたのはこの時代のことである。藤原氏の榮華が衰微し始めた時、その黄金時代の追懷に現實を忘れようとしたことが、榮華物語などの書かれた動機であらう。しかし、沈滯は息苦しいほどになり、彌縫と虚飾とによつて内部の糜爛を隠して來た文明は全く行詰まつた。さうして、潰滅した。この時、人生をはかなみ、これに執著するを迷妄とし、享樂を罪惡とする厭世觀が盛になつたのは自然である。西行や長明はこの思潮の代表者なのである。

平安朝の「つれづれ」といふ語は、世紀末のアンヌイといふ語を聯想せしめる。紫式部はその作品を中宮に奉る際に、「されど徒然におはしますらむ。またつれづれの心を御覽ぜよ」と書いてゐる。これは紫式部日記が書かれた動機を語つてゐる。

兼好

吉田兼好、五一頁
参照

る句であらう。源氏物語を讀んでも、遊樂がつれづれを慰める爲に行はれたことが多かつたのを感じる。つれづれとは展開なき沈滞の惱、充實した人生を見出し得ざる悶ではあるまいか。兼好が「つれづれなるまゝに日ぐらし硯に向かひて、心に移り行くよしなしごとをそこはかとなく書きつくれば、あやしうこそ物狂ほしけれ」と書いたのは、充實した生活、展開する思惟に入ることが出来ぬ。この途を見出さんが爲には分裂した刹那の斷想をそのままに記して、我の姿を如實に眺めなければならぬ。然るに、何といふ混亂した姿であらう。統一に赴くべき途も見出し得ない故に物狂ほしさを感ずる。」といふ如き意味ではなからうか。西行や長明は社會と人生とに背き、自然の愛、彼岸の宗教に逃れんとした人であるが、兼

如實に

靜寂主義

有識者ぶる

清貧

好は、この對立の一半を捨てて他の半面に生きるには、餘りに複雑な心の所有者であつた。彼の心中には平安朝の美的趣味と鎌倉室町時代の厭世觀とが争つてゐた。彼にとつて「つれづれわぶる」心は靜寂主義に赴かんとする心である。彼は、「佛に仕う奉るこそつれづれもなく、心の濁も清まるこゝちすれ」といひ、社會生活を離れようとする。しかし、一方には、來世の信仰に生きることの出来ぬ現實を尊重する心をもつてゐた。彼は非常に官能的であり、平安朝の教養を重んじ、有識者ぶり、古き世を戀ひ、家居の趣味等に風雅の心を述べるかと思ふと、やがて清貧を崇拜し、名利を求むる心を卑しんでゐる。彼は死を直視し、人生の無常を痛感した。それ故に、却つて生の價値を切實に感じ、自己を知り、自己に忠實になり、自己に集

皮肉 諷刺 自嘲
辯證論的な 消閑

文學序説
土居光知著、大正
十一年(二六三)七月
刊行。

中しようとした。かゝる複雑な精神内容を統一することは、
當時に於ては不可能であつた。彼は未完成の精神を尙んだ。
彼の著作は一貫した主張のない、結論のない批評となつた。
そこには現實から理想を見る皮肉、理想から現實を見る諷刺、
理想を笑ふ自嘲がある。徒然草は國文學中稀に見る緊縮し
た文章であり、辯證論的な考へ方の眞摯さがある。これを消
閑の戲筆と見ることは不可能である。

(「文學序説」に據る)

吉田兼好
卜部兼好、後宇多
上皇に仕へ上皇崩
御の後出家した、
歌人、文學者、正平
五年(三〇〇)寂、年
六十六。

七 折節の移り變り

吉田 兼好

一 四季のあはれ

物のあはれ
春はたゞ花のひと
へにさくばかりも
のあはれは秋ぞ
まされる。讀人不
知—拾遺集

折節の移り變ること、物ごとにあはれなれ。「物のあはれは
秋こそまされ」と、人ごとにいふめれど、それもさるものにて、い
ま一きは心も浮立つものは、春の景色にこそあめれ。鳥の聲
などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌
えいづる頃より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう／＼けし
きだつほどこそあれ、折しも雨風打續きて、心あわたゞしく散
過ぎぬ。青葉になりゆくまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ま
す。花橘は名にこそ負へれ、猶梅の匂にぞ、古のことも立返り
戀しう思ひ出でらるゝ。山吹の清げに、藤の覺束なき様した

花橘は
さ月待つ花橘の香
をかげば昔の人の
袖の香ぞする。讀
人不知—古今集

けしきだつ

祭

賀茂の祭、舊曆四月の中、酉の日、今は五月十五日、水雞



夕顔



六月祓源氏物語五十四卷、紫式部の作、宮庭生活を中心として平安朝の世相を描いた長篇小説は思しきこと言はぬ大鏡にある言葉。

る、すべて思ひすてがたきこと多し。

灌佛の頃、祭の頃、若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも人のこひしさもまされと、人の仰せられしこそげにさるものなれ。五月、菖蒲葺く頃、早苗とる頃、水雞のたゝくなど心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に夕顔の白く見え、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月、祓またをかし。

棚機祭るこそなまめかしけれ。やう／＼夜寒になる程、雁鳴きて来る頃、萩の下葉色づく程、早稲刈りほすなど、取集めたることは秋のみぞ多かる。また野分の朝こそをかしけれ。言續くれば、皆源氏物語、枕草子などにことふりにたれど、同じことまた今更に言はじともあらず。思しきこと言はぬは、腹ふくるゝ業なれば、筆に任せつゝ、あぢきなきすさびにて、か

あぢきなしすさび
かいやりすつをさく
遣水

すさまじきもの

御佛名
荷前の使
やんごとなし
春のいそぎ
追儼

足を空にまどふ

いやりすつべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて、冬枯の景色こそ秋にはをさく、劣るまじけれ。汀の草に紅葉の散りとままりて、霜いと白う置けるあした、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れはてて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒けく澄める二十日あまりの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞあはれにやんごとなき。公事も繁く、春のいそぎに取重ねて、催しおこなはるゝ様ぞいみじきや。追儼より四方拜に續くこそ面白けれ。つごもりの夜、いたう暗きに松どもともして、夜半過ぐるまで人の門叩き走りありきて、何事にかあらん、事々しくのゝしりて、足を空にまどふが、曉方よりさすがに音なくなりぬること年

の名残も心細けれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは、この
頃都にはなきを、あづまの方には猶する事にてありしこそあ
はれなりしか。

かくて、明行く空の景色、昨日に變りたりとは見えねど、引替
へめづらしきこゝちぞする。大路のさま松立て渡して、はな
やかに嬉しげなるこそまたあはれなれ。

(徒然草第十九段)

二 花は盛に

花は盛に、月は限なきをのみ見るものかは。雨にむかひて
月を戀ひ、垂れこめて春の行くへ知らぬも、なほあはれに情深
し。咲きぬべき程の梢散りしをれたる庭などこそ見所多け
れ。歌の詞書にも「花見にまかれりけるに、早く散過ぎにけれ
ば」とも、「さはる事ありてまからで」なども書けるは、「花を見て」と

徒然草
二卷、吉田兼好の
隨筆。

まかれりけるに

かたくななり

待出づ

友もがな

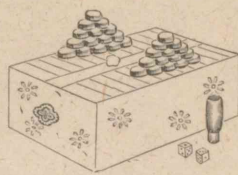
いへるに劣れることかは。

花の散り月の傾くを慕ふ習はさることなれど、殊にかたく
なる人ぞ、この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。などは
いふめる。望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、曉
近くなりて待出でたるが、いと心深く青みたるやうにて、深き
山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる村雲隠れ
の程、又なくあはれなり。椎柴・白檜などの濡れたるやうなる
葉の上いきらめきたるこそ身にしみて、「心あらん友もがな」と
都こひしうおぼゆれ。

すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。春は家を立
ちさらでも、月の夜は閨のうちながら思へるこそいとたの
もしうをかしけれ。よき人は、偏にすけるさまにも見えず、興

等閑なり
あからめ

雙六



肝潰る
まもる

ずるさまも等閑なり。片田舎の人こそ色こくよろづはもて興ずれ。花のもとにはねぢより立ちよりあからめもせずまもりて、酒飲み連歌して、はては大きなる枝心なく折取りぬ。泉には手足さし浸して、雪にはおり立ちて跡つけなど、萬づの物よそながら見る事なし。

さやうの人の祭見しさまいと珍かなりき。「見事いと遅し、そのほどは棧敷不用なり。」とて、奥なる屋にて酒飲み物食ひ、圍碁雙六など遊びて、棧敷には人を置きたれば、「渡り候。」といふ時に、各肝潰るゝやうに争ひ走り上りて、落ちぬべきまで簾張りいてて押合ひつゝ、一事も見漏さじとまもりて、とありかかりと物ごとにいひて、渡り過ぎぬれば、「又渡らんまで。」といひておりぬ。唯物をのみ見んとするなるべし。

ゆゝしげなり

らうがはしさ

都の人のゆゝしげなるは眠りていとも見ず。若く末々なるは宮仕に立ちぬ、人の後に侍ふは様悪しくも及びかゝらず、わりなく見んとする人もなし。何となく葵懸けわたしてなまめかしきに、明離れぬ程しのびて寄する車どものゆかしきを、それか、かれかなと思ひよすれば、牛飼下部などの見知れるもあり、をかしくも、きら／＼しくも、さま／＼に行きかふ、見るもつれ／＼ならず。暮るゝ程には、立てならべつる車ども、處なくなみ居つる人も、何方へか行きつらん程なく稀になりて、車どものらうがはしさもすみぬれば、簾疊も取拂ひ、目の前に寂しげになりゆくこそ、世の例も思ひ知られてあはれなれ。大路見たるこそ祭見たるにてはあれ。

鴨 長明

鎌倉時代の歌人、後出家す、號は蓮胤、建保四年(二七〇)に寂、年六十四。日野山山城國、今の京都市伏見區。

皮籠



今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀の子を敷き、其の西に閑伽棚を造り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を懸けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃往生要集如きの抄物を入れたり。傍に箏琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどもを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の壁に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕の方に炭櫃あり。之を柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばら

八日野山の閑居

鴨 長明

往生要集

六卷、惠心僧都源信の著、念佛の要旨と功德とを示したるもの、寛和元年(二四三)成る。

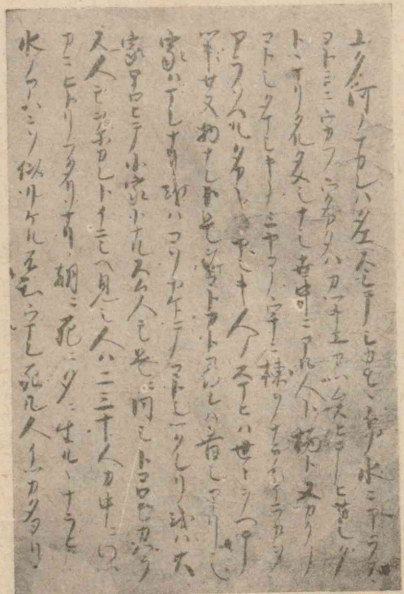
抄物 蕨のほども

みなかつ



よすが 爪木

なる姫垣を圍ひて園とす。即ち、もろくの藥草を植ゑたり。假の庵の有様かくの如し。



方丈記 (大福光寺本)

其の處のさまをいはば、南に竈あり。岩を疊みて水をためたり。林近ければ爪木を拾ふにともしからず。名を外山と言ふ。正木の葛跡をうづめり。谷しげけ

れど、西は晴れたり。觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に充て

正木の葛



観念の便
うつせみ
まめなり
口業
境界
跡の白波
世の中を何にたとへむ朝ほらけ漕ぎ行く船のあとの白波
遺集
岡の屋
山城國(京都府)宇治郡宇治村大字五箇荘の宇治川に臨める所
滿沙彌
滿誓沙彌、元正天皇の靈龜、養老頃(三十三三三三)の人
潯陽の江
潯陽江頭夜客ヲ送ル、楓葉荻花秋瑟行瑟、白樂天、琵琶

り。うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。

もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、自ら休み自ら怠るに妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、獨り居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕には、潯陽の江を思ひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しばし松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。獨り調べ、獨り詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

潯陽江

源都督

秋風の樂

流泉の曲

琵琶の秘曲の一

土居

がうな



みさご



大かた此のところに住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今すてに五とせを経たり。かりの庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、此の山に籠りて後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして其の數ならぬたぐひ、盡くしてこれを知るべからず。たびの炎上に滅びたる家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯にゐる。すなはち、人を恐るゝが故なり。われ亦かくの如し。身を知り世を知れば、願はず、まじらはず、たゞ静かなるを望とし、愁なきをたのしみとす。

親呢

すべて、世の人の住家を造る習、必ずしも身の爲にはせず。或は妻子眷屬の爲に造り、或は親呢朋友の爲に造る。或は主君・師匠及び財寶・馬牛の爲にさへ之を造る。われ今身の爲に結べり、人の爲に造らず。故如何となれば、今の世の習、此の身のありさま、伴なふべき人もなく、頼むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。それ人の友たるものは、富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直すなはなるとをば愛せず。たゞ絲竹・花月を友とせむにはしかず。人の奴たる者は賞罰の甚だしきを願み、恩顧の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすくしづかなるをば願はず。たゞ我が身を、奴とするには如かず。もし爲すべきことあれば、すなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしも

絲竹

はごくむ

たゆかり

あらねど、人を従へ人を願みるよりは安し。もしありくべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども馬鞍・牛車と心をなやますには似ず。今一身を分かちてふたつの用をなす。手の奴、足の乗物よく我が心に適へり。また、心身のくるしみを知れば、くるしむ時は休めつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたび／＼過ぐさず。ものうしとても心をうごかすことなし。いかに況や、常にありき常に働くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らむ。

衣食のたぐひまた同じ。藤の衣・麻の衾、得るに隨ひて肌はだかをかくし、野邊のつばな峰の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。人に交らざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、おろそかなれども猶味はひを甘くす。すべて、かやうのこと、



つばな

たくらぶ

三界は唯心一つ

外=別法無心
佛及ビ衆生是ノ心
三ハ差別ナシ
心ノ自行略記

七珍

七寶ともいふ
銀・珊瑚・琥珀・硃砂
をいふ

氣味

方丈記

一卷、鴨長明の
野山閑居中に書い
た隨筆、建曆二年
（二七三）成立

樂しく富める人に對していふにはあらず。たゞ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。それ三界は唯心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍も由なく、宮殿樓閣も望なし。今寂しきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出てては、乞食となることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に著（ちやく）することをあはれぶ。もし人このいへる事を疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林をねがふ。鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まらずして誰かさくらむ。

方丈記

久松潛一

愛知縣の人、國文學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十七年（三五四）生

上代文學

奈良朝時代の文學

中古文學

平安朝時代の文學

中世文學

鎌倉・室町時代の文學

近世文學

江戸時代の文學

東歌

萬葉集中、卷十四、卷二十に收められてゐる東國地方の歌

九 山の文學と水の文學

久松 潛一

文學を土地の上から考へる時、都會の文學と田舎の文學とも分けられる。文學史の中心となる文學は都會で生まれた文學が多く、その點から、遷都が文學に大きな變化を與へる原因となるのである。上代文學と中古文學との相違も、大和の都と山城の都との相違が與へる變化とも見られる。中世文學や近世文學への展開は遷都ではないけれども、幕府の設けられた土地といふ所から、自ら文化の中心ともなつたのである。しかし、もとより田舎の文學が無かつたのではない。萬葉集の東歌も田舎の文學であり、その他民謡などは田舎の文學である。かういふ都市や田舎の成立というても土地の

信州
信濃國(長野縣)。
東海道
京都から東方沿海の諸國を経て、江戸に達する街道。

地勢等による事が多いのであるが、都や田舎の出来るのは、人為的な力を離れて、自然そのものを眺める時、山と水、深林と水の流域とがこの大きな區別となる。さうして、この山と水とが文學の生まれる上に重要な要素となつて居るのである。山國の人が意志が強く、力強い性質があるに對して、水邊の人は理性が発達して和かであることは大體言はれる。信州の山國と東海道の海岸とでは、その自然が與へる人間の性格の相違が生ずる。この點が文學の上にも大きな相違となるのである。そこで、日本文學をも山の文學と水の文學との二つの立場から分けることも出来るではなからうか。これは個人個人の作家の上にも言はれることであるが、時代の文學をもこの何れかで一括することも出来るであらう。

大和時代

大化革新の後より
桓武天皇延暦十三年(792)遷都の頃
まで約百四十年。

平安時代

平安奠都より源賴朝が鎌倉に幕府を開くまで約四百年間。

淀川

勢多・木津・賀茂・大堰の諸川を併はせ、大阪市の西北を流れて、大阪灣に注ぐ。

日本文學史の上から見ると上代の文學は山の文學と言はれる。大和は一體に水が乏しく又水が悪い。大和時代の幾度の遷都も、水を求めてであるとする考も一應の道理はあるであらう。上代文學が素樸で力強いのも、山の文學と見て説明がつく。しかし、人間の志向は山から水の方を求める。険しい山よりも和な水の方を憧憬するのは自然である。そこで、水を求めて終に山城に都を定められた。山城も山に圍まれて居る。しかし、こゝには賀茂川の美しい水がある。水が加はると山も美しくなる。中古文學が和かく優美であるのも、水の要素が多くなつたためである。平安時代の自然は水が常に多くの働をなして居り、遣水のかすかな音は女房の心を慰めるものであつた。中古文學は賀茂川から淀川の方へ

隠者

進まうとした。併し、平安末期からの世の悲しさ寂しさが、再び水から山の方へ方向を變へさせた。山は孤獨なる心をもつ。世の悲しさから世を遁れようとする時、それは水から山へ隠れる。山隠りは次の中世文學の主なる流をなすものである。隠者の文學はこれである。隠者の生活にも種々ある。眞に現實を厭ふ所から、現實生活を離れて孤獨の生活へ入らうとする場合と、現實に對する理想や欲望の遂げられない所から、現實生活から離れて隠者生活に入らうとする場合もある。しかし、現實を厭ふのも現實を眞に厭ふといふよりは、現實の愛が根柢となつて、その愛の實現せられざる所から世を厭ふに至るのである。そこに中世の隠者は消極的ではあるが、現實に對する愛もそれを否定しようとする心との間の相

相剋

剋が見られるのである。山林の生活の間から現世を時々のぞんで居るのである。方丈記を見る時、日野山の奥から人戀ふる心が常に見られるのではないか。西行が山に入つても、また現實の世界へ歸つて來るのもそれである。

吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらむ

この心は西行に於ては常住の心であつたのである。山より現實に出ようとする心がある。これに比すると、兼好の徒然草には世の中に對する執着から離れようとする心がある。山の境地に安住しようとするものがある。それは兼好法師家集と徒然草との間にも、その推移が見られるのである。もとより徒然草にも、この世の愛と歡樂とを憧憬れる心と、それ

兼好法師家集
吉田兼好の歌集

頓阿

俗名二階堂貞宗、歌人、元中元年(三三〇)圓寂、年八十四

草庵集

十卷、續五卷、頓阿の歌集。

正徹

歌人、京都東福寺の僧、長祿二年(三二二)歿、年七十九

心敬

歌人、連歌師、京都聖護院の住僧、文明七年(三三三)歿

幽栖

さいめごと

心敬著、二卷、連歌についてのべたもの。

孤高

を否定しようとする心とがある。それは或説では矛盾といひ、或説ではより高き精神に於て統一されて居ると言ふ。自分ばむしろ後者をとるものであるが、その心境こそは隠者の心と言ふべきである。この隠者の心こそ中世文學を支配するものである。それは頓阿の草庵集にも、正徹や心敬の心にも流れて居るものであつた。それは孤獨なる心を深めた境地であつた。「道になさけふかき人の中に、幽栖閑居を事として、常の會席にもま見え世に知られざる中に、名をえたるよりもと見え侍る人おほしとなん。」(さいめごと)といふ心敬の詞はかういふ心境の現れである。

山の文學はかくの如き孤高の精神を基調とする。中世文學の基調はこゝにあつたのである。さうして、中世から近世

元祿時代

東山天皇の御代。

豊臣秀吉

尾張國(愛知縣)の人、關白、慶長三年(三三〇)薨、年六十

大阪城

今、大阪市東區にある、天正十一年(三三三)築城。

關達

桃山藝術

桃山時代の藝術、豪壯・華麗・雄渾等をその特徴とする。

近松

門左衛門、號は巢林子、大阪の淨瑠璃及び狂言作者、享保九年(三六四)歿、年七十二。

に至る時に山の文學から水の文學への推移が見られる。近世文學の中心は第一に川を下つて大阪にその現れを見た。大阪に文學の花の開いたのは元祿時代であるけれども、既に豊臣秀吉が大阪城を築いてこゝに移つた時に、山から水への移動が見られたのである。秀吉の關達なる性格は桃山藝術を生出した。それを日本に於ける文藝復興の現れと見るのも至當な見方であらう。元祿文學は桃山藝術のそれと接續する。近松や西鶴の文學が中世文學に比して異なる點は多いが、その明かるい朗かさに於て大きな相違がある。山林から水邊へ出て來た文學である。これは芭蕉の俳諧に於ても同じ精神が見られる。芭蕉の俳諧の中心である「さび」が、中世の幽玄の發展であることは明らかであるが、「さび」の文學を幽

玄の文學と比するところか、明かるさがある。それは山から水への相違ではないか。芭蕉は、旅に一生を過したやうであるが、「さび」の俳諧を建立した後には、江戸が中心となつてゐたと言つてもよい。さうして、芭蕉の句を見ても、

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

といふ如き句もあるけれども、

荒海や佐渡に横たふ天の川

五月雨を集めてはやし最上川

といふやうな荒海や大河をうたつた句を立ち所に挙げ得るに對して、芭蕉と共通性を多く有すると言はれる西行の歌から、海や川を扱つた作を挙げようしても容易に挙げられない。こゝにも兩者の相違が見られると思ふ。元祿文學は川のほ

最上川
羽前國(山形縣)の
大河。

文化・文政

紀元二四六四—二

四八五。

爛熟

纖細な味

一九

十返舎一九、本名

重田貞一、小説家、

天保二年(四九二)

歿、年六十七。

膝栗毛

東海道中膝栗毛、

十五卷、滑稽紀行。

とり、もしくは、海邊に發生した文學と言つても差支ない。それが元祿文學の明かるく花やかな一の動機となつてゐる。近世文學は大阪から東海道を傳つて江戸に移る。文化文政の文學は江戸といふ水邊に近い土地に生まれた文學である。文化・文政文學は元祿文學に比すれば花やかな明かるさは少いが、それは近世文學の發生完成から爛熟に至る過程の爲であつて、水の文學である點に變化はない。文化・文政に見られる纖細な味は水の味である。この時代に於て一九の膝栗毛が現れたが、その最も中心となつたのが東海道であるのもそれを示してゐる。東海道が旅の文學の中で最も心ひかれるのは、上方と江戸との交通の中心であつた所から生ずる歴史的回顧もあるが、水邊のもつ明かるい朗かさが懐かしみを與

春の海
燕村の句。

へるのであらう。水は山のやうに孤獨でなく、何人にも笑ひかけ親しみを見せる。そこに感傷と懐かしみが生ずる。たとへば春のやうである。

春の海ひねもすのたり／＼かな

といふ句は、春と水とが最も適當に結びついて居る。近世文學は大阪と江戸と東海道とによつて代表される水の文學である。明治以後の文學もその中心は水の文學である點に近世文學からのつながりが見える。

水の文學は結局都會の文學である。都會は水邊に生じ、發展する都會は水邊のそれに限られて居る。東京を中心とする明治以後の文學を水の文學と言ふのもそこから説明される。たゞ明治以後に於ては、交通の自由なるため、山の文學も

島崎藤村

名は春樹、長野縣の人、詩人、小説家、明治五年（三五三）生。

島木赤彦

本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年（二五八〇）歿年五十一。

素樸性

加つて居る。たとへば、信州の文學の如きもそれである。島崎藤村氏の文學の如き、島木赤彦氏を中心とする短歌の如き、山の文學の要素が多く入つて居る。山嶽の美が人の心をとらへて居るのもこの精神の流である。

以上の如くして、文學史を山の文學と水の文學と言ふ立場から見れば、上代文學と中世文學とは山の文學の要素が多く、中古文學には山から水へ出ようとする精神がかなり濃厚であり、近世文學に於て水の文學となつて居ると見られる。明治以後の文學は、水の文學を主要素として山の文學の流も多少見られると思ふ。固より、上代文學と中世文學とを比較する時は、一方には素樸性があるに對して一方には到り得た深さがある。童心の美と老境の美との區別がある。素樸美

枯淡な味
 素盞鳴尊
 伊弉諾尊の御子、天照大神の御弟、日本武尊
 景行天皇四十二年
 義經
 源義朝の第九子、頼朝の弟、爲朝の明、文治五年八月を衣川の館で自殺、年三十一
 實朝
 源氏、鎌倉三代の將軍、歌人、承久元年二十八、薨、年二十八
 親房
 北畠氏、學者、勤王家、正平九年(三三)薨、年六十一
 神皇正統記
 六卷、北畠親房著、神代から後村上天皇踐祚までの事蹟を記し、吉野朝の正統なることを論じたもの。

と平淡美とは一見似て居るやうであるが、一方には経験のない生の味があり、一方にはあらゆる経験を経てきた枯淡な味がある。優美や花やかさや技巧を経て居ない單純性と、優美や花やかさや技巧を経てきた後の單純性との相違である。上代文學と中世とはさういふ相違を感ずる。併し、兩者には山岳的な英雄的精神を見得る點に共通性がある。上代文學に於ける素盞鳴尊や日本武尊の英雄神話並びに歴史傳説は、中世の爲朝や義經の國民傳説に於て再現して居る。上代の國家的、民族的、精神は中世の實朝の和歌や親房の神皇正統記に於て再現して居る。個性的よりも民族的な點に於て共通性がある。そこに山の文學としての共通性がある。この比較は、中古文學と近世文學との間にも相違はある。一方に

古典味があるならば、一方には近代味がある。一方に典雅な貴族的な性質があるならば、一方には卑近な平民的な性質がある。一方には現在の我々に容易に近づけないかけ離れたものがあるに對して、一方には親しみ易いなれ／＼しいものがある。それは中古の雅樂と近世の三味線音樂との相違であり、大和繪と浮世繪との相違である。併し、なほ兩者を通じて明かるい花やかさがある。それは上代文學や中世文學には見出し得ないものである。そこに水の文學としての特性があると思われるのである。

かくして、自分は日本の文學史觀において、明治以前の文學の中で中古文學と近世文學とを黄金時代にすることには一面の眞理を認めるが、しかし、中世文學を單に暗黒時代の文學

過渡時代

セルパン
隨筆雜誌、本課は
その昭和六年(三五九
二九月號から採つ
た。

伊藤左千夫
千葉縣山武郡成東
町生。
中村憲吉
廣島縣雙三郡布野
村生。

とし、過渡時代の文學とする見方には、多くの修正を要するも
のがあるとおもふ。上代文學と中世文學、中古文學と近世文
學といふこの時期の相互の間に類似を見出すことによつて、
山の文學と水の文學との二つの性質に分けて、相互の展開を
かんがへること、一つの見方として許されると思ふのであ
る。

(セルパン)

うちわたす八十の群山もえ出づる若國日本年明けに
けり
伊藤 左 千 夫
新みどり裏山したの川澄みて水底に石の見ゆるしづ
けさ
中 村 憲 吉

承久三年
紀元一八八一年。
みかど
順徳天皇、第八十
四代。
春宮
後に仲恭天皇、第
八十五代。
御兄の院
土御門天皇、第八
十三代。
父みかど
後鳥羽天皇、第八
十二代。
家實
近衛基通の子、仁
治三年(二九三三)薨
年六十四。
道家
後京極良經の子、
寛元三年(二九五五)
薨、年六十。
あづまの若君
頼經、當時鎌倉將
軍、康元元年(二九
五九)薨、年三十九。
院
本院を申す、後鳥
羽天皇。
心づかひすべかめ
り

一〇 新 島 守

承久も三年になりぬ。四月二十日、みかどおりさせ給ふ。
春宮四つにならせ給ふに譲り申させたまふ。近ごろ皆この
御齡にて受禪ありつれば、これもめでたき御行末ならむかし。
同じ二十三日、院號の定めありて、今おりさせ給へるを新院と
聞ゆれば、御兄の院をば中院と申し、父みかどをば本院とぞ聞
えさする。このほどは、家實のおとと、關白にておはしつれど、
御讓位の時、左大臣道家のおとと、攝政になり給ふ。かのあづ
まの若君の御父なり。
さて、院のおぼし構ふること、忍ぶとすれど、やう／＼もれ
聞えて、ひがしざまにもその心づかひすべかめり。あづまの

伊賀の判官光季
佐藤朝光の長子、
左衛門尉檢非違
使、承久三年二六
二歿。
かつがつ
御勤じ

かつは
時房
北條時房、義時の
弟、仁治元年二六
〇歿、年六十六。
泰時
北條泰時、義時の
長子、仁治三年二
六三歿、年六十。
本意

代官にて伊賀判官光季といふ者あり。かつがつかれを御勤
じのよし仰せらるれば、御方に參るつはもの押寄せたるに、遁
るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめてたしとぞ院
はおほしめしける。

あづまにもいみじうあわてさわぐ。「さるべくて身の失す
べき時にこそあんなれ。」と思ふものから、討手の攻來りなむ時
に、はかなきさまにて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、みづ
からしたまふことならねば、かつはわが身の宿世をも見るば
かり。」と思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と、二人を頭と
して、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前
に据ゑていふやう、「おのれをこのたび都に參らすることは、思
ふところ多し。本意の如く清き死をすべし。人にうしろ見



鳳輦

義時
北條義時、時政の
子、元仁二年二六
四歿、年六十二。
うしろめたし
足柄
相模國(神奈川県)
駿河國(静岡県)
縣の界嶺、南北
に延亘する諸峯の
總名である。
箱根山
足柄山の南にあ
る。俗に箱根八里
といひ坂東に入る
天險である。
心を
得

えなむには、親の顔また見るべからず。今を限と思へ。賤し
けれども義時君の御爲にうしろめたき心やはある。されば、
横ざまの死をせむことばあるべからず。心をたけく思へ。
おのれうち勝つならば、再びこの足柄箱根山は越えつべし。」な
ど、泣く／＼いひきかす。「まことにしかなり。又、親の顔をが
まむこともいとあやふし。」と思ひて、泰時も鎧の袖をしぼる。
かたみに今や限とあはれに心細げなり。
かくてうち出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時たゞ
ひとり鞭をあげてはせ來たり。父、胸うち騒ぎて、「いかに。」と問
ふに、「軍のあるべきやう、大かたのおきてなどは、仰せの如くそ
の心を侍りぬ。もし道のほとりにも、はからざるに、かたじ
けなく鳳輦を先立てて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なること

かしこまり
宇治・勢多
宇治は山城國（京都府）勢多は近江國（滋賀縣）にあつて共に京都に入る要所。
公經
藤原氏、西園寺家の祖、寛元二年（九〇）薨、年七十四。
御うまご
將軍賴經をいふ、賴經は公經の女の出。

も侍らむに参りあへらば、その時の進退はいかゞ侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとて、ひとり馳せ侍りき」といふ。義時、とばかりうち案じて「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向かひて、弓を引くことはいかがあらむ。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦を切りて、ひとへにかしこまりを申して、身を委せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましたながら、軍兵をたまはせば、命を捨てて、千人が一人になるまでも戦ふべし」といひも果てぬに、いそぎ立ちにけり。

都にもおぼしまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、宇治勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意、心ことなり。公經の大將ひとりのみなむ、御うまごのこともさる事に

能保
藤原氏、一條氏を稱す。
故大將
源賴朝。
義朝
「能保の室」
「良經の室」「道家の室」
「公經の室」「道家の室」
下賴經
七條院
藤原種子、後鳥羽上皇の御母、安貞二年（一一八五）薨、年七十二。
忠信
藤原氏。
清經
藤原清親の誤か。
宗家
藤原宗行の誤か。
修明門院
藤原重子、順徳上皇の御母、文永元年（一一九三）薨、年八十三。
範茂
藤原氏、承久の亂の戰將。

て、北の方一條中納言能保といふ人のむすめなり、その母北の方は故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重くおぼして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中將御門大納言宗家、又、修明門院の御はらからの甲斐宰相中將範茂など、つぎ／＼あまた聞ゆれど、さのみはしるしがたし。軍にまじり立つ人々、このほか上達部にも殿上人にもあまたありき。

中院はあかて位をすべり給ひしより、言に出でてこそ物したまはねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの御騒にも、殊にまじらひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事なども、掟て抑せられけり。

富士川

甲斐國(山梨縣)に發して駿河灣に入る。

天龍

天龍川のこと、諏訪湖(長野縣)から出て遠江國(靜岡縣)を流れて海に入る。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川天龍などえもいはず漲りさわぎで、いかなる龍馬もうちわたしがたければ、攻めのぼるものゝふどもあやしくなやめり。かゝれども遂に都にちかづくよしきこゆれば、君の御ものゝふも出て立つ。その勢六萬餘騎とかや。宇治勢多へ分かちつかはす。世の中ひゞきのゝしるさま、言の葉もおよばずまねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎ満ちたり。「いかゝあらむ」とみかども御心亂れおぼしまどふ。かねてはたけく見えし人々も、まことのきはになりぬれば、いと心あわたゞしく、色を失ひたるさまども、頼しげなし。

六月二十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂にみか

保元のためし

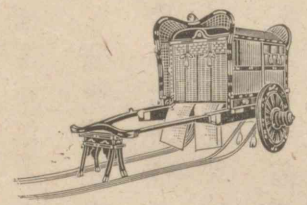
保元の亂(八二〇)後、崇徳上皇を讃岐(香川縣)に遷し奉つた例。

鳥羽殿

城南の離宮ともいふ、京都市伏見區下鳥羽に舊跡がある。

あやしげなり

ものにもがなや「とりかへす物にありしならぬわが身と思はむ」と源氏物語河海抄に引いてある。



網代車

たのいくさやぶれぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、言はむ方なくあきれて、上下ただ物にぞあたりまどふ。あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍計らひ掟てつゝ、保元のためしにや、院の上都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院宮々、所におぼしまどふ事さらなり。

本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、

あさましうあはれなり。「ものにもがなや」と思さるゝもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御とし四十に一つ二つや餘らせ給ふらむ、まだいとをしかるべき御程なり。信實朝

信實

藤原氏、歌人、畫家、肖像畫に巧みであつた。藤原隆信の子、文永二年(一一九三)歿、年八十有九。
御船にたてまつる

臣召して御姿うつし書かせらる。七條院にたてまつらせ給はむとなり。かくて、同じ十三日に、御船にたてまつりて、遙なる浪路をしのぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いかなりける代々の報にかとうらめし。

新院も佐渡國にうつらせ給ふ。さて上達部殿上人それより下はた残りなく、このことに觸れにしたぐひは、重く軽く罪に當る様いみじげなり。中院ははじめよりしろしめさぬことなれば、あづまにもとがめ申さねど、父の院遙に移らせたまひぬるに、のどかにて都にあらむこといとおそれありとおぼされて、御心もて、その年閏十月十日、土佐國の畑といふ所に渡らせ給ひぬ。

本院は、六つにて位に即き給ひて、十三年おはしましき。お

土佐國畑
土佐國(高知縣幡多郡)

土佐院
土御門天皇を申す

佐渡院
順德天皇を申す

津の國の

津の國のこやとも人をいふべきに際こそなけれ、蘆の八重葺、和泉式部、後拾遺集

藐姑射の山

支那にて仙人の住むといふ想像上の山、上皇の御所を祝し奉つていふ語

霞の洞

仙人の住む處、太上天皇のおはします處、仙洞御所ありく

り給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下はおなじ事なりしかば、すべて三十六年がほどの國のあるじとして、萬機の政を御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへ給へりしそのほど、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有様にて、遠きを憐み、近きを撫でたまふ御惠、雨のあしよりもしげければ、津の國のこやのひまなき政を聞き召すにも、難波の葦のみだれざらむことをおぼしき。藐姑射の山の峰の松もやうやう、枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御すまひ、幾春を経ても、空ゆく月日のかぎり知らず、のどけくおはしましぬべかりける世をありく、てよしなき一ふしに、今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりく、にさすらへ、磯の苫屋に軒をならべて、おのづからこととふものとは浦に釣するあ

我がふる里

けしきばかり
ことそぐ

柴のいほり

いづくにも住まれずばたゞすまであらむ柴の庵のしほしなる世に。(西行法師)新古今集

ゆゑづく

水無瀬殿

本院の造り給うた殿、攝津國大阪府三島郡島本村大字廣瀬にあつた。

ま小舟、鹽焼くけぶりのなびく方を、我がふる里のしるべかとばかりながめすぐさせ給ふ御すまひどもは、それまでと月日を限りたらむだに、明日知らぬ世のうしろめたさにいと心ほそかるべし。まして、いつをはととかめぐり逢ふべき限だになく、雲の浪、けぶりの浪の幾重とも知らぬ境に、世を盡くし給ふべき御さまども、くちをしといふもおろかなり。

このおはします所は、人離れ、里遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山かげにかたそへて、大きなやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかりことそぎたり。まことに、柴のいほりのたゞしはしとかり、そめに見えたる御やどりなれど、さるかたになまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿おぼし出づるも夢の

二千里の外
三五夜中新月ノ
色、二千里外故人ノ心。(白樂天)

銀臺、金園、三五夜、仲新月、白、二千里外、故人、心、白樂天

増 鏡

十卷、著者未詳、後鳥羽天皇から醍醐天皇までの事蹟を記した編年體歴史物語

後鳥羽上皇御製

本課に續く増鏡の文中に擧げられてゐる。

やうになむ。はるく、と見やらる、海の眺望、二千里の外も、のこりなき心ちする、今更めきたり。潮風のいとこちたく吹きくるを聞き召して、

ろして吹け

同じ世にまたすみのえの月や見むけふこそよそにお
きの島守

(増 鏡)

あやめふくかやが軒端に風すぎてしどろにおつるむ
ら雨の露

故郷を別れ路におふるくずの葉の秋はくれどもかへ
る世もなし

(後鳥羽上皇御製)

大原 山城國(京都府)愛宕郡大原村
 文治二年 和元一八四六年
 法皇 後白河法皇、建久三年(金三)崩御、御年六十六
 建禮門院 名は徳子、平清盛の次女、高倉天皇の中宮、安徳天皇の御母
 北祭 賀茂の祭のこと、五二頁参照
 夜をこめて 徳大寺云々
 源平盛衰記には、後徳大寺右大臣實定、花山院大納言兼雅(以下略)と見える
 清原深養父 平安朝の歌人、生歿年未詳
 補陀落寺 山城國(京都府)愛宕郡
 小野の皇太后宮 御名歡子、關白藤

かゝりし程に、文治二年の春の頃、法皇、建禮門院の大原の閑居の御住まひ御覽ぞまほしう思し召されけれども、二月、彌生の程は嵐烈しく、餘寒もいまだ盡きせず、嶺の白雪消えやられて、谷のつらゝも打解けず。春過ぎ、夏來つて、北祭も過ぎしかば、法皇夜をこめて大原の奥へぞ御幸なる。しのびの御幸なりけれども、供奉の人々は徳大寺花山院土御門以下公卿六人、殿上人八人、北面少々候ひけり。鞍馬通の御幸なれば、彼の清原の深養父が補陀落寺、小野の皇太后宮の舊跡を叡覽あつて、それより御輿に召されけり。遠山に懸る白雲は、散りにし花のかたみなり。青葉に見ゆる梢には、春の名残ぞ惜しまるゝ。

二大原御幸

原教通の女、後冷
 皇天皇后の皇后、宮
 中を出て兄の僧靜
 丹の山房て佛に歸
 依せられた。

寂光院

聖徳太子の開基



よしあるさま
 糸を亂る―糸を亂
 す
 青葉まじりの
 夏山の青葉まじりの
 の遅櫻初花よりも
 めづらしきかな
 藤原盛房―金葉集

頃は卯月二十日餘りのことなれば、夏草の茂みが末を分入らせ給ふには、はじめたる御幸なれば、御覽じ馴れたる方もなく、人跡絶えたる程も思し召し知られて哀なり。



建禮門院像

西の山の麓に一字の御堂あり、すなはち寂光院これなり。古う造りなせる泉水木立、よしあるさまの所なり。「葺破れては霧不斷の香を焼き、扉落ちては月常住の燈を挑ぐ」とも、かやうの所をや申すべき。庭の夏草しげりあり、青柳糸を亂りつゝ、池の浮草波に漾ひ、錦をさらすかとあやまたる。中島の松にかゝれる藤波の、うら紫に咲ける色、青葉まじりの遅櫻、初花よりも珍しく、岸の山吹咲亂れ、八重立つ雲

ゆるぶ
緑蘿の垣
翠黛の山
つた



しのぶ

瓢箪屢

橘直幹の作、和漢朗詠集にある。

顔淵

名は回、孔子の弟子、西暦前四八二年歿、年三十二。

の絶間より山郭公ハトトヤスの一聲も、君の御幸を待ち顔なり。法皇これを窺覽あつて、かうぞ遊ばされける。

池水にみぎはの櫻散りしきて波の花こそ盛なりけれふりにける岩の絶間より落來る水の音さへゆるびよしある所なり。緑蘿イロハナの垣、翠黛アヲの山、繪にかくとも筆も及び難し。さて、女院の御庵室を御覽ずれば、軒には蔦薺あさかほ這ひかゝり、しのぶ交りの萱草むすねぐさ、瓢箪屢ひょうたん空し、草顔淵くさげんが巷に滋し。藜藿れいこく深く鎖せり、雨、原憲げんけんが樞トボリを濕すシメスともいひつべし。杉のふき目もまばらにて、時雨も霜もおく露も、洩る月影にあらそひて、たまるべしとも見えざりけり。後は山、前は野邊、いさゝ小笹に風さわぎ世にたゝぬ身のならひとて、うきふし繁き竹柱、都の方の言傳は間遠に結へるませ垣や、わづかに言とふものとは、峰に木

原憲

字は子思、孔子の弟子。

たまる

ませ垣

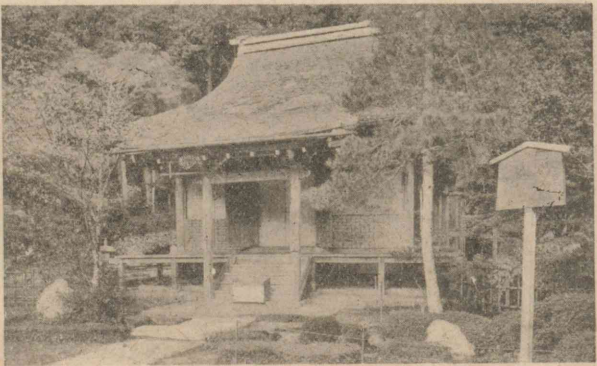
つま木

青つゞらくる人

傳ふ猿の聲、賤がつま木の斧の音、これらが音づれならては、まさ木のかづら青つゞらくる人稀なる所なり。

法皇、人やある。」と召されけれども、御應へ申すものもなし。

稍あつて、老い衰へたる尼一人参りたり。「女院は何處へ御幸なりぬるぞ。」と仰せければ、「此の上の山へ花摘みに入らせ給ひて候。」と申す。「さやうのことに仕へ奉るべき人も無きにや。」さこそ世を厭ふ御習といひながら、御いたはしうこそ。」と仰せければ、此の尼申しけるは、



寂光院本堂

いたはしうこそ

五戒

因果經

過去現在因果經、
四卷、宋の求那跋
陀羅の譯

つやく

悉達太子

釋迦出家前の名、
悉達多、中印度カ
ピラ王國淨飯王の
太子。

伽耶城

カピラ城のことを
誤りいふ。

檀特山

北印度健駄羅國に
在りて釋迦の菩薩
行を修せしところ。

成道正覺す

「五戒十善の御果報の盡きさせ給ふによつて、今かゝる御目を御覽するにこそ候へ。捨身の行になじかは御身ををしませ給ひ候べき。因果經には、過去ノ因ヲ知ラント欲セバ、其ノ現在ノ果ヲ見ヨ。未來ノ果ヲ知ラント欲セバ、其ノ現在ノ因ヲ見ヨ。」と説かれたり。過去未來の因果を悟らせ給ひなば、つやくや御歎あるべからず。悉達太子は十九にて、伽耶城を出でて、檀特山の麓にて、木の葉を連ねて肌をかくし、峰に上つて薪を採り、谷に下つて水を掬び、難行苦行の功によつてこそ、終に成道正覺し給ひき。」とぞ申しける。此の尼の有様を御覽ずれば、身には絹布のわきも見えぬものを結び集めてぞ著たりける。「あの有様にても、かやうの事申す不思議さよ。」と思し召して、「抑汝は如何なる者ぞ。」と仰せければ、さめくと泣いて、しば

2346
178910

故少納言

藤原通憲、鳥羽天皇・崇徳天皇・近衛天皇の三天皇に歴事した、平治の亂の時、信賴に殺された。

しは御返事にも及ばず。やゝあつて涙を抑へて、申しけるは、申すにつけて憚り覺え候へども、故少納言入道信西が女、阿波の内侍と申すものにて候なり。母は紀伊の二位。さしも御いとほしみ深うこそ候ひしに、御覽じ忘れさせ給ふにつけて身の衰へぬる程思ひ知られて、今更せん方なうこそおぼえ候へ。とて、袖を顔に押當てて忍びあへぬさま、目も當てられず。法皇、げにも汝は阿波の内侍にこそあなれ。今更御覽じ忘れける、唯夢とのみこそ思し召せ。とて、御涙せきあへさせ給はず。供奉の公卿、殿上人も、不思議の尼かな。と思ひたれば、ことわりにてありけるぞ。とぞ各申しあはれける。

彼方此方を叡覽あるに、庭の千草露重く、籬に倒れかゝりつつ、外面の小田も水越えて、鳴立つひまも見えわかず。さて、女

來迎の三尊
衆生を淨土に引攝するために降つて來た彌陀如來・觀世音菩薩・勢至菩薩をいふ。

中尊
彌陀如來

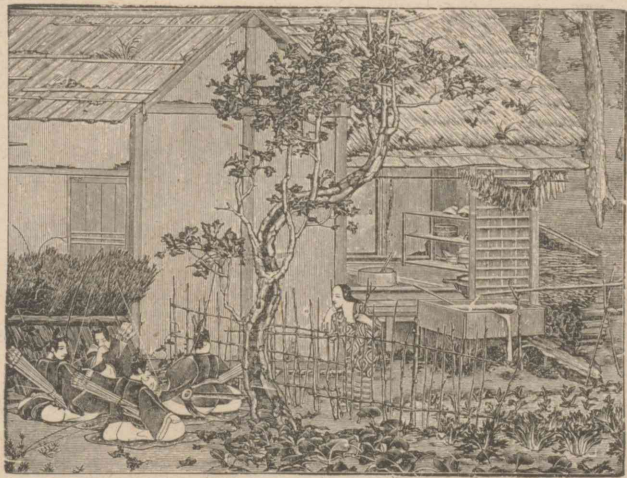
善導和尚
支那唐代の名僧、大いに淨土教を興し、専ら念佛を勸めた。永隆二年(西曆六三〇)寂年六十

先帝
安徳天皇、第八十一代

八軸の妙文
法華經八卷

九帖の御書
五部九卷ともいひ、觀經疏四帖・往生禮讚一帖・法事讚二帖・觀念法門一帖・般若讚一帖をいふ。何れも善導和尚の著

淨名居士
維摩詰のこと、釋迦と同時代の人



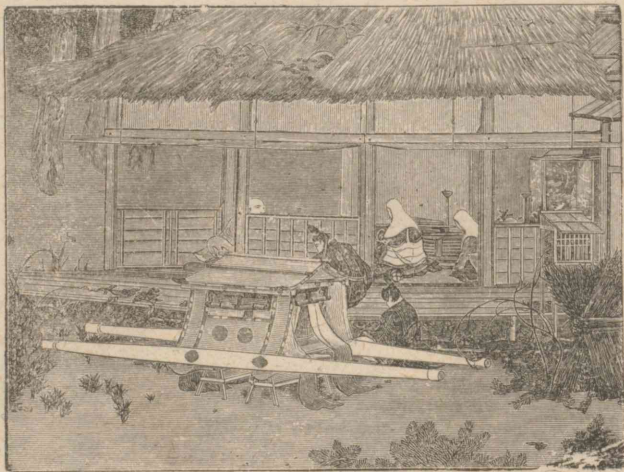
大原御幸

院の御庵室へ入らせ給ひて、障子を引きあけて御覽すれば、一間には來迎の三尊おはします。中尊の御手には五色の絲をかけられたり。左には普賢の繪像、右には善導和尚並びに先帝の御影をかけ、八軸の妙文、九帖の御書も置かれたり。蘭麝の薰にひきかへて、香の烟ぞ立ちのぼる。かの淨名居士の方丈の室の内に、三萬二千の床をならべ、十方の諸佛を請じ給ひけんも、かくやとぞ覺えける。障子に

定基

法名寂昭、號は圓通大師、長保四年(公三)入宋し、長元七年(公四)彼の地で歿した。

思ひきや……とは
雲居の月



下村觀山筆

は、諸經の要文ども色紙に書いて、ところどころにおされたり。其の中に、大江の定基法師が、清涼山にして詠じたりけん、笙歌遙ニ聞ユ孤雲ノ上、聖衆來迎ス落日ノ前」とも書かれたり。少しひきのけて、女院の御歌とおぼしくて、思ひきや深山の奥にすまひして雲居の月をよそに見んとは

さてかたはらを観覽あるに、御寢所と思しくて、竹の御竿に、

麻の御衣紙の御衾などけられたり。さしも本朝漢土の妙なるたぐひ敷を盡くし、綾羅錦繡リョウキョウキンシユの装もさながら夢になりけり。法皇御涙を流させたまへば、供奉の公卿殿上人も各見まゐらせしことなれば、今の様に覺えて、皆袖をぞ絞られける。

やゝあつて、上の山より、濃き墨染の衣著たりける尼二人、岩の懸路を傳ひつゝ、おり煩ひたる様なりけり。法皇これを御覽じて、「あれはいかなる者ぞ。」とお尋ねあれば、老尼涙を押へて、「花筐ハナカサ臂にかけ、岩つゝ、じ取具して持たせ給ひたるは、女院にて渡らせたまひ候なり。爪木に蕨折具して候ふは、鳥飼の中納言維實の女、五條の大納言國綱の養子、先帝の御乳母、大納言の佐。」と申しもあへず泣きけり。法皇も世にあはれげに思し召してせきあへ給はず。女院は、「さこそ世を捨つる御身といひ

懸路
花筐

鳥飼の中納言維實

維實は一に伊に作

る藤原伊通の子

永曆元年(二六〇)

薨、享年不詳

五條大納言國綱

國は邦の誤、藤原

氏

大納言の佐

大納言は、國綱の

官名、平重衡の夫

参らせんずらん

ながら、今かゝる御有様を見え参らせんずらん恥づかしさよ、消えも失せばや。」と思し召せどもかひぞなき。

宵々毎の閨伽の水、掬ぶ袂もしをるゝに、曉おきの袖の上、山路の露も繁くして、絞りやかねさせ給ひけん、山へも返らせ給はず、又御庵室へも入らせ給はず、御涙に咽ばせ給ひ、あきれて立たせましましたる所に、内侍の尼参りつゝ、花筐をば賜りけり。「世を厭ふ習、何か苦しう候べき。疾くノ、御對面候うて、還御なし参らせ給へ。」と申しければ、女院御庵室に入らせおはします。「一念の窓の前には攝取の光明を期し、十念の柴の扇には聖衆の來迎をこそ待ちつるに、思ひの外に御幸なりける不思議さよ。」とて御見参ありけり。

(平家物語灌頂卷)

局
平家物語

十二卷、作者未詳

平家一門の榮華と

没落と破滅を敘し

た軍記物語、成立

年代は承久(二六九

一八二)以前である

吉澤義則

京都府の人、國語
國文學者、文學博
士、京都帝國大學
名譽教授、明治九
年(三五)生。

一一 平假名と女子

吉澤 義則

平假名は、草假名といつてゐた時代もあるが、最初は女手と呼ばれてゐた。女手とは女文字といふことで、この文字が主として女子に用ひられてゐたからの名稱であつたものと考へられる。

我が祖先は、神代の昔から、好んで和歌を詠んでゐたのであるが、支那に於ける詩文尊重の風潮に刺戟せられて後は、更に一層和歌の流行を見るに至り、遂に萬葉時代を現出せしめ、萬葉集を貽すまでになつたのである。雨露となり肥料となつて、一時は和歌を成長せしめた詩文も、いつしか和歌を衰へしめる黴菌とかはつてゐた。

平安遷都

桓武天皇の延暦十三年(四四)

桓武天皇

第五十代、延暦二十五年(四六)崩御、御年七十。

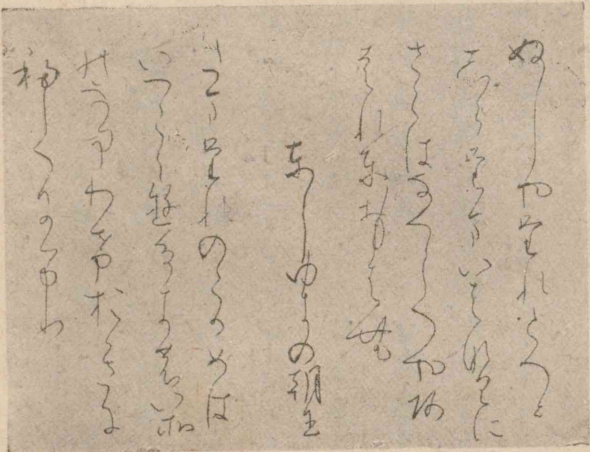
平城天皇

第五十一代、天長元年(四四)崩御、御年五十一。

ぬしやたれとへど
しらすまいはなく
にさらばなべてや
あはれとおもはむ
としゆきの朝臣
たまだれのこがめ
はいづここゆるぎ
のいそのなみわけ
おきにいにてけり

嵯峨天皇

第五十二代、漢學
を奨励せられ、詩
文書道に御堪能で
あらせられた、承
和九年(五三)崩
御、御年五十七。



古今和歌集切 藤原行成(筆)

都は奈良から京に遷つたが、桓武天皇の御代には、まだ和歌

の衰微した徴候は見えないやうである。平城天皇の御代にも、よしや萬葉時代にあつたやうな潑刺たる生氣は見られなかつたにせよ、詠歌の餘風はさながらに存續してゐたと考へてよいであらう。

ところが、嵯峨天皇の御代を経て、淳和天皇の御代になると、文藝の世界は詩文の獨舞臺となつて、和歌は公會の席から全くその影をひそめてしまつた

淳和天皇

第五十三代、漢詩文を御奨励になり、御自身も漢詩人におはした、承和七年（五〇〇）崩御、御年五十五。

藤原宣孝

紫式部の亡夫、大貳三位賢子の父。

のである。吾人はこの時代を國風暗黒時代と呼んでゐる。つまり世人の好尚が和歌を去つて詩文に趨いたのである。けれども、婦人はさうした好尚の潮流に乗つて行くことが出来なかつた。それは、婦人に漢學の素養がなかつたからである。紫式部日記に見えてゐる一挿話は、この間の消息を如實に物語つてゐると思ふ。

紫式部は、若うして夫藤原宣孝に死にわかれた。そのころのことであるが、一日宣孝の書齋に入つて、その遺書を繕いてゐた。蓋し、獨り靜かに有りし世の追憶に耽つてゐたのであらう。それを見た侍女達は、貴女は、そのやうに漢籍などを讀まうと遊ばすから、不幸をお招きになるのでございます。昔は御經を見るのさへ、御婦人は爲さらなかつたものでござい

現當二世

光明皇后

聖武天皇の皇后、御名光明子、天平寶字四年（四三〇）崩御、御年六十。

有智子内親王

嵯峨天皇の皇女、承和十四年（五〇七）薨御年四十一。

枕草子

この話は第二十段に出てゐる。

藤原師尹

忠平の第五子、左大臣右大将、安和二年（二〇五）薨年五十一。

その女子教育

師尹の女藤原芳子、後に村上天皇の御時、宣耀殿の女御となられた方の教育。

ます。」と忠告したと、その日記に記されてある。佛典が漢文で書かれてあるといふ理由で、現當二世安樂の爲であつてさへ、それを讀むのは忌まれたといふことである。固より、光明皇后の如き、有智子内親王の如き、漢學に通じた一二の方々がかつたではない。現に紫式部の如きもその一人であつた。が、それは稀な例外であるに過ぎなかつた。實際當時の女子教育には漢學は含まれてゐなかつたやうである。王朝時代のことではあるが、枕草子が傳へてゐる女子教育を見ると、一には、御手を習ひ給へ、次には、琴の御ことをいかで人に彈きまさんとおぼせ、さて、古今の歌二十卷を皆うかべさせ給はんを御學問にはせさせ給へ。」とある。これは藤原師尹がその女子教育に用ひた方針であつたが、これを一般に推し及しても大

きな間違は無からうし、また、これによつて上代の女子教育を想像して見ても差支はなからうと思ふ。

漢學の素養を持合はせなかつた女子は、時の流に棹さして、男子と好尙を同じくすることは出来なかつた。すなはち、詩文の隆盛をよそに見ながら、女子は依然として和歌の賞玩にとちこもつてゐた。またさう爲さざるを得なかつたのである。男子も、女子と交渉を持つ世界に於ては、餘儀なく和歌を詠みもしたけれども、さうでない交際場裡に於ては時好を追うて、詩文の製作に腦漿をしぼつてゐたのである。かくて、男子の用ひる文字は漢字であつた。また、さうでない日常の記録にも、男子は必ず漢字を用ひるものと因縁づけられてゐたのであつた。それゆゑ、古くは漢字を男手或は男文字といつ

時好
腦漿

てゐたのである。

和歌を寫す文字の假名であることはいふまでもあるまい。勿論漢字も交ぜて書いてないではないが、その主要文字が假名であつたことは、記紀、萬葉集などを一見すれば、多くをいふ必要はなからうとおもふ。

腐心する

男子が詩文に腐心し漢字を筆にしてゐた間に、女子は和歌に精進し假名を用ひてゐたのである。假名も初はもとより眞草ともに漢字そのまゝの形態を承けついで萬葉假名であつたが、それは點畫が餘りにも複雑で、常用するには煩瑣に堪へなかつたであらう。で、頻用してゐる中に、筆は知らず識らず省略へ省略へと歩いて來たのであつた。かうして、草書はいつとなく平假名にまで發達して、遂に、支那人も、それを漢字

掣肘する

麒麟兒

氣まぐれ

草體から生まれたものとも氣附かずに、日本の國字として稱揚するまでになつてしまつたのである。草書をこゝまで發達せしめるには、女子に漢字の知識が乏しかつたといふ事が與つて力あつたものと思はれる。若し女子に漢字の知識が豊であつたならば、省筆の際にも常にその知識に掣肘せられて、あれほど大膽な略體を創出することは出来なかつたであらう。されば、この便利な平假名は、いはゞ不具な女子教育が生出した貴い麒麟兒であつて、これが男女共學であつたならば、男女同等の教育を受けてゐたならばと思ふと、皮肉な自然の氣まぐれを感じないではゐられない。

所謂國風暗黒時代がかうした偉大な製作品をはぐくんでゐようとは誰も氣附かなかつた。恐らくは作者自身もそれ

清和天皇

第五十六代、元慶四年(西曆一〇三〇)崩御、御年三十三。

光芒

とは氣附かなかつたであらう。清和天皇頃になつて國民精神は目ざめた。目ざめた國民精神は先づ國語に呼びかけた。和歌は復興された。物語文學は展開された。かくて、絢爛たる王朝文學は、千年後の今日までも、否、永劫に燦然たる光芒を投げつゞけるであらう。而して、若し便利な平假名が發達してゐなかつたならば、短い形の和歌はともかくも、あの千古の傑作である源氏物語のやうな長篇は終に現れないで了つたであらうことを思ふと、平假名の效績を讚嘆せずにはゐられないではないか。

なほ、終に臨んで一言しなければならぬことは、國風暗黒時代に於て女子が國語を愛撫した事實である。男子が詩文に夢中になつてゐた間にも、女子は和歌と消息とによつて、國語

ひたむきなる

帯木
短歌雑誌、本課は
その昭和五年(五五
〇)九月・十月號登
載の「平假名の話」
を筆者の補訂せら
れたものに據つ
た。

を愛撫しつゞけてゐた。如何に平假名が生まれてゐても、洗煉された國語の準備がなかつたならば、一朝にして、物語文學の出現を見ることは困難であつたであらう。それが、女子のひたむきなる愛撫の力によつて、十二分に用意せられてゐた。この國語の愛撫は、假名の使用を伴はなければならず、即ち、平假名成育の搖籃でもあつたわけである。これらは、すべて計畫的なものでもなく、意識的なものでもなかつたと思ふ。けれども、これをその効果の上から觀て、日本の女子が、國家に盡くし、同胞に盡くした貢獻中、最も偉大なる業績として、絶大の讃辭をさゝげて然るべきものと、固く信ずるのである。

(帯木第十一號に據る)

古今和歌集
二十卷 最初の勅撰集、醍醐天皇の延喜五年(五五五)紀友則・紀貫之・凡河内躬恒・壬生忠岑等の撰進。

しほの山
鹽の山、山梨縣。さしでの磯
山梨縣東山梨郡笛吹川の西岸八幡村、千鳥の名所

遍昭
俗姓名良岑宗貞、大納言安世(桓武帝の皇子)の子、遍昭集はその家集、寛平二年(五五〇)寂年七十五。(一説)

深草の帝
第五十四代仁明天皇を申す
ひえ
比叡山。
たらちねの
むば玉の

一三 中古短歌抄

題しらす

よみ人しらす

しほの山さしでの磯にすむ千鳥君がみ代をば八千代とぞ鳴く (古今和歌集) 賀歌

遍昭

何くれといひありき侍りし程に、仕うまつりし深草の帝崩れおはしまして、變らむ世を見むもたへ難く悲し、藏人頭中將などいひて夜畫なれ仕うまつりしなごりなからむ世にも交らじとて、俄に家の人々にも知らせでひえに登りて頭おろし侍りしにもさすがに親などのことは心にやかかりけむ

たらちねはかかれとてしもむば玉の我が黒髪は撫で

在原業平

平城天皇の皇子阿保親王の第五子、在五中將藤原氏を抑へるため惟喬親王を立てようとした、元慶四年(西)卒、年五十四。

惟喬のみこ

惟喬親王、第五子、元代文徳天皇の皇子、寛平九年(西)卒、御年五十四。

天の川

河内國(大阪府)北河内郡にある川

小野小町

歌人、仁明・文徳兩天皇の朝に仕へ清和天皇の貞観八年(西)頃任を辭したと傳へられる

ずやありけむ (遍昭集)

在原業平

惟喬のみこのともに狩にまかりける時に、天の川といふ所の川のほとりにおりゐて、酒など飲みけるついでに、みこのいひけらく、狩して天の川原にいたるといふ心をよみて、杯はさせ。といひければよめる

かりくらし棚機つ女に宿からむ天の川原にわれは來にけり (古今和歌集)

題しらす

小野小町

色見えてうつろふものは世のなかの人の心の花にぞありける (同左)

藤原敏行

歌人、書道も名手、昌泰四年(西)卒、(或は延喜七年ともいふ)

凡河内躬恒

古今集撰者の一人、歌道で貫之と雌雄を争つた、延喜七年(西)卒、年四十九。

内侍のかみ

内大臣藤原高藤の女満子。

右大将藤原朝臣

高藤の三男定國、満子の兄。

住の江

攝津國(大阪市)住吉の海岸。

秋たつ日よめる

藤原敏行

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる (同左)

山寺にまうでたりけるによめる

やどりして春のやまべに寝たる夜は夢のうちにも花ぞ散りける (同左)

凡河内躬恒

内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風にかきたりける歌

住の江の松を秋風ふくからにこゑうちそふる沖つし

壬生忠岑

古今集撰者の一人、大體元慶より延喜の人、歿年不詳。

寛平の御時

第五十九代宇多天皇の御代の年號(西暦一五五七)。

紀友則

古今集撰者の一人、延喜五年(西暦一五五七)歿、年六十一。

伊勢

伊勢守藤原繼蔭の女、當代女流歌人中第一、天慶二年(西暦九二〇)歿、(一説)享年不詳。

らなみ (同右)

寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

壬生 忠 岑

みよし野の山のしら雪ふみわけて入りにし人のおと

づれもせぬ (同右)

櫻の花のちるをよめる

紀 友 則

ひさかたの光のどけき春の日にしづごころなく花の

ちるらむ (古今和歌集)

家を賣りてよめる

伊 勢

あすか川淵にもあらぬわが宿もせに變りゆくものに

ぞありける (同右)

壬生忠見

歌人、忠岑の子、忠見集はその家集、傳未詳。

藤原公任

詩歌に長ず、和漢朗詠集撰者、長久二年(西暦一〇七二)歿、年七十六。

後拾遺和歌集

白河天皇の詔を奉じ、寛治元年(西暦一〇九一)藤原通俊の撰進。

會根好忠

素性が低く六位で丹後掾であるから、會丹と侮り言はれた、平安朝中期歌壇の異彩、傳未詳。

難波に葦多かり舟漕ぐ

壬 生 忠 見

難波瀉行きかふ舟の綱手繩くるこそ見えね葦の間を

なみ (忠見集)

藤 原 公 任

寂昭法師入唐せむとて筑紫へまかりくだるとて、七月七日舟に乘

り待りけるにつかはしける

天の川のちのけふだにはるけきをいつとも知らぬ船

出かなしな (後拾遺和歌集)

會 根 好 忠

三島江につのぐみわたる葦の根のひとよばかりに春

めきにけり (後拾遺和歌集)

能因法師

歌人、俗名橘永徳、世に古曾部入道と稱す、生歿年未詳。
新古今和歌集
勅撰集、二十卷、後鳥羽上皇の院宣により、藤原定家・藤原家隆・源通具・藤原有家・藤原雅經(他に、事半ばにして歿した寂蓮)に於て、元久二年(二八五)撰進。

和泉式部

歌人、和泉守橘道貞の夫人、小式部の母、晩年の消息全く不明、和泉式部集はその家集。

源經信

桂大納言ともいふ、俊頼の父、詩歌に長ず、承徳元年(二七五)薨、年八十二。

千載和歌集

勅撰集、二十卷、後白河法皇の院宣により、文治三年(一一九三)撰進。藤原俊成撰。

山里にまかりてよみ侍りける

能因法師

山里の春のゆふぐれ来て見れば入相の鐘に花ぞちりける (新古今和歌集)

蟲

和泉式部

その事といひても鳴かぬ蟲のねも聞きなしにこそ悲しかりけれ (和泉式部集)

山家雪朝といへる心をよめる

源經信

朝戸あけて見るぞさびしき片岡の櫓の廣葉にふれるしら雪 (千載和歌集)

水風暮涼といへる事をよめる

源俊賴

風ふけばはすのうき葉に玉こえて涼しくなりぬひぐらしのこゑ (金葉和歌集)

藤原基俊

公實卿の寮にて對水待月といへる事をよめる

夏の夜の月まつほどの手すさびに岩もる清水いくむすびしつ (金葉和歌集)

藤原俊成

百首の歌奉りけるとき秋の歌とてよめる

夕されば野べの秋風身にしみて鶉なくなり深草のさと (千載和歌集)

源俊賴

源經信(前出)の子、金葉集の撰者、卒年等未詳。

金葉和歌集

勅撰集、十卷、白河天皇の院宣を奉じて、源俊賴、天治二年(一六七)撰進。

藤原基俊

新撰朗詠集を撰した、康治元年(二八〇)三卒、年八十七。

藤原俊成

定家の父、千載集撰者、元久元年(二八五)薨、年九十一。

崇徳天皇

第七十五代、和歌に秀でさせ給ひ、その御集一卷を崇徳天皇御製と申す、長寛二年(八二二)巴崩御、御年四十六。

御軍やぶれて後御ぐしおろさせ給ひて 崇徳天皇
憂きことのまどろむ程は忘られて覺むれば夢の心地
こそすれ (崇徳天皇御製)

西行法師

俗名佐藤憲清、元北面の武士、法號圓位、山家集はその家集、西行法師歌集ともいふ、建久元年(八五〇)寂、年七十三。

題しらす 西行法師

寢覺する人の心をわびしめてしぐるる音はかなしかりけり (山家集)

催馬樂

奈良朝時代の民謡で、馬を牽く時に歌つたものを、平安朝時代に至つて、唐樂と共に雅樂の中に入れ、歌曲としたもの。莫告藻



梁塵秘抄

後白河法皇御撰、平安朝末の今様・催馬樂・神樂等の歌謡を分類集成せられたもの。鶯



一四歌 謠抄

一 催馬樂より

伊勢の海の、清き渚に潮間に、莫告藻や摘まむ、貝や拾はむ、玉や拾はむ。

二 梁塵秘抄より

遊をせんとや生まれけむ、戲せんとや生まれけん、遊ぶ子供たはぶれの聲きけば、我身さへこそ動ゆるがるれ。 (四句神歌三首)

鳥は見る世に色黒し、鶯は年は経れども猶白し、鴨の首をば短しとて繼ぐものか、鶴の足をば長しとて切るものか、舞へく、蝸牛かたつぶり、舞はぬものならば馬の子や牛の子に蹴くみさ

比良の山
近江國(滋賀縣)、
高さ一七四米。

せてん、踏破^{たふ}らせててん、まことに美しく舞うたらば、華の園
まで遊ばせん。

高砂の高かるべきは高からで、など比良の山高々^{たかね}高と高
く見ゆらん。
(二句 神歌)

舊き都を来て見れば、
浅茅が原とぞ荒れにける。
月の光はくまなくて、
秋かぜのみぞ身にはしむ。

(今様 二首)

萬劫年ふる龜山の
下は泉のふかければ、
苔むす岩屋に松生ひて、
梢に鶴こそ遊ぶなれ。

三 和漢朗詠集より

早春

氣ハ霽レテ風新柳ノ髪ヲ梳リ、
水消エテハ浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ。
都良香
たにかぜにとくるこほりのひまごとにうちいづるなみ
やはるのはつはな
源當純

螢

螢火亂レ飛ンデ秋已ニ近シ、
辰星早ク没シテ夜初メテ長シ。
元稹
くさふかくあれたるやどのともしびのかぜにきえぬは
ほたるなりけり
山部赤人

和漢朗詠集

二卷、藤原公任の
撰、和歌・漢詩を
朗詠の用の爲に編
纂したもの。

都良香

文章博士、文徳實
録の撰者、元慶三
年(852)卒、年三
十六。

源當純

右大臣能有の子、
醍醐天皇の御代の
頃の人。

元稹

唐の詩人、白居易
と並稱せられた、
西暦三年歿、年五
十三。

山部赤人

萬葉集の代表的歌
人、奈良朝初期の
人、傳記未詳。

白居易

唐の詩人、號は樂天、白氏文集がある、西暦八四六年歿、年七十五。

三五夜中ノ新月ノ色、
二千里ノ外ノ故人ノ心。

白居易

みづのおもにてるつきなみをかぞふればこよひぞあき
のものなかなりける

源順

源順
文學者、歌人、和名類聚鈔の撰者、永觀元年(六四三)卒、年七十三。

初多

菅原文時
文學者、道眞の孫、天元四年(八四二)歿、年八十四。

床ノ上ニハ卷收ム青竹ノ簞、
匣ノ中ニハ開キ出セリ白綿ノ衣。

菅原文時

かみなづきふりみふらずみさだめなきしぐれぞふゆのはじめなりける

紀貫之

卷末附録參照

光頼

藤原頼朝の子、桂大納言、承安四年(一一三三)薨、年五十一。

十二月十九日

平治元年(一一五二)

公卿僉議

信頼

藤原氏、光頼の甥



一五 光頼卿參内

内裏には十二月十九日、公卿僉議とて催されけり。勸修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の舉動過分なりとて不參にておはしましけるが、參内して承らむとて、ことにあざやかに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩きたまひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹巻著せ、雑色の装束に出で立たせ、自然の事もあらば人手にかくな。汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。とて、御身近く置き、その外清げなる雑色四五人召具して、大軍陣を張りて處々の門々を固め守護しけるを事もせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共大きに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を経て、殿上

雑色
ひらむ
そばむ
殿上
上藤

長方
藤原顯長の子

しどけなし
色代す



を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上、藤達皆下にぞ著かれたる。光頼卿、こは不思議の事かな。人はいかに振舞ふとも、あれは右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものを。と思はれければ、左大辨宰相、長方卿末座の宰相にておはしましけるに、今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ。と色代してしづしづと歩み、信頼卿の上にむずと著き給

母方の伯父
光頼は信頼の母の兄に當る。

衛府督
右衛門督信頼を指す。

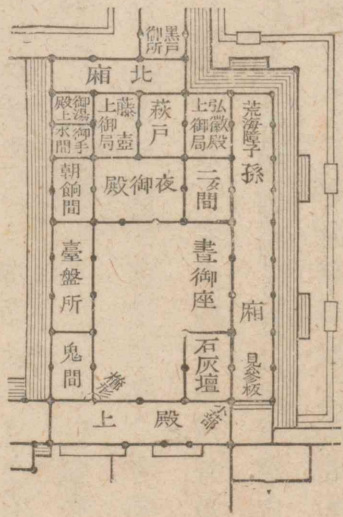
つい立つ

さんぬる

ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の伯父なる上、大力の剛の人なれば、殊に畏れて見えられけり。右の袖に居懸けられて、伏目になりて色を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見給ふに、光頼卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏とり直し、氣色して、今日は衛府督が一座すると見えて候。召すに參ぜざらむ者をば、死罪に行はるべしとやらむ承りて、参内する所なり。抑何事の御諍ぞ。と問ひけれども、信頼卿物も宣はず。著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。程經て、光頼卿つい立つて、惡しう參つて候ひけり。とて、しづしづと歩み出でられけり。庭上に充満ちたる兵ども、これを見奉りて、あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に著く人、一

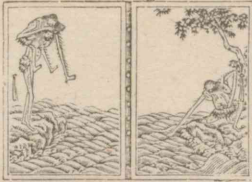
頼光・頼信
共に源満仲の子。

人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戦せば、いかばかりかたのもしからむ」と申せば、傍なる者、むかし頼光・頼信とて、源氏の名將おはしき。その頼光をうち反して、光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。といへば、また傍より、などその頼信をうち反して、信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはするぞ。といへば、壁に耳、天に口といふことあり。おそろしく、聞かじ。といひながら、みなしのび笑に笑ひけり。



清涼殿平面圖

荒海の障子



別當惟方

檢非違使別當藤原惟方

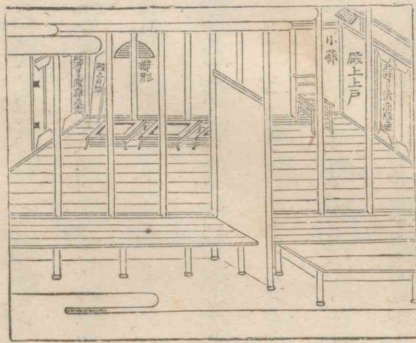
有職

少納言入道

藤原通憲入道信西

神樂岡

今、京都市左京區吉田神社の東方、俗稱吉田山。



殿上の圖

光頼卿、かやうに振舞ひ給へども、急ぎでも出でられず、殿上の小部の前、見參の板高らかにふみ鳴らして立たれたりけるが、荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人数にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人共なり。その中に入らむ事甚だ面目なるべし。さても、先日右衛門督が車の尻に乗つて、少納言入道が首實檢の爲に、神樂岡へ向はれける事は如何に。以ての外しかるべからざる振舞

かな。近衛大將檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乗り給ふ事、先蹤も未だ聞及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず」とのたまへば、別當「それは天氣にて候ひしかば」とて、赤面せられけり。

光頼卿重ねて、「こは如何に、勅諭なればとて、いかてか存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ徳政なり。一度も悪事に従はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴なつて、讒佞の輩に與せざりし故に、昔より今に至るまで、人にさしもどかるゝほどのことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣

勸修寺内大臣

藤原高藤

三條右大臣

高藤の子定方

延喜

醍醐天皇の年號

(二六六—二七二)

英雄

さしもどく

大貳清盛

清盛は當時官太宰大貳であつた。

熊野

熊野三山、紀伊國(和歌山縣)東牟婁郡にある。

切目の宿

紀伊國(和歌山縣)口高郡にある。

和泉

今の大阪府の南部

紀伊

今の和歌山縣及び三重縣の南部

伊賀

今の三重縣の西北

伊勢

今の三重縣の大部

主上

二條天皇、第七十八代

黒戸の御所

清涼殿の北、瀧口

に語らはれて、累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は、熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉紀伊伊賀伊勢の家人等待ちうけて馳せ加り、大勢にてあなる。信頼卿が、かたらふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めむには、時刻をやめぐらすべき。もし又、火などをかけなば、君もいかてか安穩にわたらせ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも、朝家の御歎なるべし。如何にいはむや、君臣ともに自然の事もあらば、天下の珍事、王道の滅亡、この時にあるべし。右衛門督は、御邊に大小事を申し合はするところを聞ゆれ。相構へ、隙を伺ひ、謀をめぐらして、玉體恙なく在します様に思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。「黒戸の御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」

の西にある御所。
 上皇 後白河天皇、第七十七代。
 一本御書所 内裏の東門建春門を入つた南侍從所・御書所の次である。
 内侍所 温明殿内に天照大神の御靈代として神鏡を齋き祀つた所。
 温明殿 綾綺殿の東、宣陽門内にある。
 夜のおとこ 清涼殿内にある、主上の御養所。
 朝餉 朝餉の間のこと。
 影ろふ

「温明殿に。」^{うんめい}「劔璽は何處に。」^{けんじ}「夜のおとこに。」と、左衛門督次第に尋ね給ひければ、別當からぞ答へられける。又、朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、それは右衛門督住み候へば、その方さまの女房などぞ影ろひ候らむ。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、世の中は今ばかりござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し参らせたり。末代なれども、さすがに日月はいまだ地に墜ち給はぬものを、天照大神正八幡宮は王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝には未だかくの如きの先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」とて、のろくしげに憚る所なく口説き給へば、惟方は人もや聞くらむと、よにすさまじげに立たれたれども、

許山

支那古代の隠士、堯が天下を彼に譲らんとするを聞いて、耳汚れたりとして、穎川で耳を洗つた。

平治物語

三卷、著者未詳、或は葉室時長なりともいふ、平治の亂の顛末を記した軍記物語。

かつは悲しくて、われ如何なる宿業によつて、かゝる世に生まれ會ひ、憂き事をのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の内裏の有様を見聞かむ輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかり泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事を悲しみて、打ちしをれてぞ出て給ひける。

古より今に至るまで王者の人臣を賞する、和漢兩朝同じく文武二道を以て先とす。文を以ては萬機の政を助け、武を以ては四夷の亂を治む。天下を保ち國土を治むる謀は文を左にし、武を右にすと見えたり。譬へば二つの手の如し。一つも關けては叶ひ難し。兩端以て適ふときは、四海に風波の恐なく、八荒民庶の愁なし。それ澆季に及びては、人奢つて朝威を蔑如し、民猛くして野心を挾む、能く用意すべし。

樋口一葉

名は夏子、山梨縣の人、小説家、明治廿九年（五十五）年二十五。

一六 そとろごと

樋口 一葉

一 雨の夜

庭の芭蕉のいと高やかに延びて、葉は垣根の上やがて五尺もこえつべし。今歳はいかなればかくいつまでも丈の低き、など言ひてしを、夏の末つ方、極めて暑かりしに、唯一日・二日・三日とも數へずして、驚くばかりになりぬ。秋風少しそよ／＼とすれば、端のかたよりはかなげに破れて、風情次第にさびしくなるほど、雨の夜の音なひ、これこそは哀なれ。こまかき雨ははらく／＼と音して、叢がくれ鳴くこほろぎのふしをも亂さず、風一しきり颯と降りくるは、彼の葉にばかり懸るかといたまし。

疊紙

取られぬ



雨はいつも哀なる中に、秋はまして身にしむこと多かり。

更けゆくまゝに、燈火の影な、どうらさびしく、寝られぬ夜なれば、臥床に入らんもせんなしとて、小切入れたる疊紙とり出し、

何とはなしに針をも取られ

ぬ。いまだ幼くて伯母なる

人に縫物ならひつる頃、衽先

一棲の形などむつかしういは

葉れしいと恥づかしうて、これ

習ひ得ざらんほどはと、家に

近き某の社に日參といふことをなしける、思へばそれも昔なりけり。教へし人は苔の下になりて、習ひとりし身は大方物、忘れしつ。かくたまさかに取出づるにも、指の先こはきやう

たまさかに

にてはかばかしうは得も縫ひ難きを、彼の人あらば如何ばかり言ふかひなく浅ましく思ふらんなど、打返しその昔戀しうて、そゞるに袖もぬれそふ心地す。遠くより音して歩み來るやうなる雨、近き板戸に打ちつけの騒がしさ、いづれもさびしからぬかは。老いたる親の瘦せたる肩もむとて、骨の手に當りたるも、かゝる夜はいとゞ心細さのやる方なし。

二 月の夜

村雲すこし有るもよし、無きもよし。磨き立てたるやうなる月の影に尺八の音の聞えたる、上手ならばいとをかしかるべし。三味も同じこと、琴は西片町あたりの垣根ごしに聞きたるが、いと良き月に弾く人の影も見まほしく、物がたりめきてゆかしかりき。親しき友に別れたる頃の月、いとなぐさめ

西片町
東京市本郷區、高
臺の閑靜な邸町で
ある。

難うもあるかな。千里のほかまでと思ひやるに、添ひても行かれぬものなれば唯羨ましうて、これを假に鏡となしたならば人の影もうつるべしやなど、はかなき事さへ思ひ出でらる。さゝやかなる庭の池水にゆられて見ゆる影、物いふ様にて、手すりめきたる所に寄りて久しう見入るれば、はじめは浮きたるやうなりしも次第に底深く、此の池の深さいくばくとも測られぬ心地になりて、月は其の底の底のいと深くに住むらんと物のやうに思はれぬ。久しうありて仰ぎ見るに、空なる月と水のかげと、いづれを眞の形とも思はれず。物狂ほしけれど、箱庭に作りたる石一つ水の面にそと取落せば、さゝ波すこし分かれて、これにぞ月の影たゞよひぬる。かくはかなき事して見せつれば、甥なる子の小さきが眞似て、姉さまのすること

罪得がまし

さながら

夜なく

疎々し

我もするとて、硯の石いつのほどにも出てつらん、我もお月さま砕くのなりとて、はたと捨てつ。それは亡き兄の物なりしを、身に傳へていと大事に思ひたりしに、はかなき事にて失ひつる、罪得がましき事と思ふ。この池かへさせてなど言へども、未ださながらにてなん。明けぬれば月は空にかへりて名残もとゞめぬを、硯はいかさまになりぬらん。夜なく影や待取るらんとあはれなり。嬉しきは月の夜のまらうど、つねは疎々しくなどある人の心安げに訪ひ寄りたる、男にても嬉しきを、まして女の友のさるべき人ならば、如何ばかり嬉しからん。自ら出づるに難からば、文にてもおこせかし。歌よみがましきは憎きものなれど、かゝる夜の一言には身にしみて思ふ友ともなりぬべし。大路ゆく辻占うりのこゑ、汽車の

なごり
うつゝなし

まぎれ

一とせ
明治廿七年(三十五)のこと。

三 雁がね

笛の遠くひびきたるも、何とはなしに魂あくがるゝ心地す。

朝月夜あさづよのかげ空に残りて、見し夢のなごりもまだうつゝなきやうなるに、雨戸あけさせて打眺むれば、さと吹く風竹の葉の露を拂ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落來るやうに雁がねの聞えたる、ひとつなるはなほさら、列ねし姿もあはれなり。思ふ人を遠き縣あがたなどにやりて明け暮便の待ちわたらるゝ頃、これを聞きたらば、いかなる思やすらんと哀なり。朝霧夕霧のまぎれに、聲のみ洩らして過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音聞えて、月すむ田面に落つらんかげ思ひやるも哀れ深しや。旅寢の床、佗人の住家、いづれに聞きても物思添ふる種なるべし。一とせ下谷の邊にかりそめの家居し

下谷
東京市下谷區、下
谷の邊とは一葉の
假寓した龍泉寺町
（大音寺前）をい
ふ。
たつき

て、商人といふ名も恥づかしき、唯いさゝかの物とりならべて
朝夕のたつきとなしし頃、檐端の庇あれたれど月さすたより
なるにはあらで、向かひの家の二階のはづれをわづかにもれ
出づる影したはしく、大路に立ちて心細く打仰ぐに、秋風高く
吹きて空にはいさゝかの雲もなし。あはれかゝる夜よ、歌よ
む友のたれかれ集ひて、靜かに浮世のほかの物がたりなど言
ひ交しつるはと、俄に其のわたり戀ひしう涙ぐまるゝに、友に
別れし雁唯一つ、空に聲して何處にか行く。さびしとは世の
つね、命つれなくさへ思はれぬ。擣衣の音に交りて聞えたる
はいかならん。三つ口など囃して小さき子の大路を走れる
は、さもさびしき物のをかしう聞ゆるやと羨ましくなん。

つれなし
擣衣

四 蟲の聲

垣根の朝顔、やうく小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一
花みゆるも、その初の事思はれて哀なるに、松蟲鈴蟲いつしか
鳴弱りて、朝日待ちとりて、竈馬こほろぎのはかなげに聲する、小溝の端
壁の中など、あるかなきかの命のほど、老いたる人、病める身な
どにて聞きたらば、さこそ比べられて物悲しからめ。まだ初
霜は置くまじきを、今年は蟲の齡いと短くて、早くも聲のかれ
がれになりしかな。轡蟲はかしましき聲も形もいと丈夫め
かしきを、いつしか時の間におとろへ行くらん、人にもさる類
はありけりとをかし。鈴蟲はふり出でて、鳴く聲の美しけれ
ば、物ねたみされて齡の短きなめりと點頭うなづかる。松蟲も同じ
ことなれど、名と實と伴なはねば、怪しまるゝぞかし。常磐の

かしまし

點頭く

松を名に呼べれば、千歳ならずとも枯野の末まではあるべき
 を、萩の花散りこぼるゝやがて聲せずなり行く、さる盛の短き
 ものなれば、しばしも似よとこの名は負はせけん、名づけ親ぞ
 知らまほしき。この蟲一とせ籠に飼ひて、露にも霜にも當て
 じといたはりしが、その頃病に臥したりし兄の、夜な／＼鳴く
 こゑ耳につきて物わびしく厭はしく、あの聲なくばこの夜や
 すく眠らるべしなど言へるも道理にて、いそぎ取りおろして、
 庭草の茂みに放ちぬ。その夜鳴くやと待ちたれど更に聲の
 聞えねば、俄に露の身に寒く鳴くべき勢の無くなりしかと憐
 み合ひき。その年暮れて、兄は空しき數に入りつ。又の年の
 秋、今日ぞ此の頃など思ひ出づる折しも、ある夜更けて近き垣
 根のうちにながらの聲聞え出でぬ。よもあらじとは思へ



(畫水針中田)

籠

虫

二葉全集

二卷、馬場孤蝶校
訂、明治四十五年
（一九一七）六月刊行。

ど、たゞそのもののやうに懐かしく、戀ひしきにも珍しきにも
涙のみこぼれて、この蟲がやうに、よし異物なりとも、聲形同じ
かるべき人の唯今こゝに立出て來らば如何ならん、我はその
袖つと捉へて放つ事をなすまじく、母は嬉しさに物は言はれ
て、涙のみふりこぼし給ふや、父は如何さまになし給ふらんな
ど、怪しき事を思ひよる。かくて二夜ばかりは鳴きつ。その
後は何處に行きけん、假にも聲の聞えずなりぬ。今も松蟲の
聲聞けばやがてその折思ひ出でられて物かなしきに、籠に飼
ふ事は更にも思ひ寄らず、自ら野邊に鳴弱りゆくなど、唯その
人の別のやうに思はるゝぞかし。

（二葉全集）

小宮豊隆

福岡縣の人、獨文學者、文藝批評家、東北帝國大學教授、明治十七年（三十四）生。

裕福に

番町

東京市麹町區。

一七ドイツの婦人

小宮 豊隆

ベルリンで私の下宿してゐた家の主人は、元大きな本屋の支配人とかをしてゐたのださうで、當時はなんにもしてはゐなかつたが、相應に裕福に暮してゐるらしかつた。理科大學に通つてゐる息子と細君との三人家族に、下女を一人使つて、彼等は東京で言へば番町とでもいつたやうな閑靜な屋敷町の、どつしりした建物の、表の一階に住んでゐた。息子はちやうど二十歳、細君は四十五六か、もう少しは上かぐらゐの年配であつた。

この下宿に来て先づ驚かされた事は、朝飯を家でとるについて、細君から、あなたは紅茶を何杯めしあがるか、と聞かれた

當惑する

事であつた。當時私は朝飯に、パンの外に半熟の卵をたべる事にしてゐた。その卵では、ホテルで五分とか三分とか、時間で註文する事に慣れてゐたのだから、此所で少しも當惑する事がなかつた。併し、紅茶を毎朝何杯めしあがるかは、自分といへどもはつきりとは分からなかつた。咽喉が乾いてゐれば、二杯でも三杯でも飲む。乾いてゐなければ、一杯の半分しか飲まない事もある。日本にゐても、又こつちのホテルに泊つてゐても、そんな事は、その時々の腹工合で適宜に取計らつて、少しも不都合のなかつた事である。併し、今さう言つて聞かれる以上、たとひ是までの習慣はどうであらうと、兎も角も、何杯ときめて返事をしなければならぬ。仕方がないから、私は二杯と答へた。二杯とさへ言つて置けば、飲みた

くない時には残して置けばいい。飲みたい時でもさう三杯も飲みたい時はめつたにないと考へたからである。

次いで驚かされた事は、風呂の事であつた。風呂を沸かしてくれと注文すると、細君が、お風呂は何度の熱さに沸かしませるか、と聞返した。是も紅茶同様、日本では出鱈目で通つて来た事である。温ければ焚かせる。熱ければうめさせる。何度のお湯がちやうど好い湯加減だなどといふ事は、計つて見た事もなければ、また計つて見ようと考へた事もない。第一私は、何度のお湯は熱くて、何度のお湯は温いかも、よく知つてはゐなかつたのである。併し是も、聞かれて見れば、返事をしない譯には行かない事であつた。それで私は、可い加減に、四十度と答へた。三十六度は、我々の平熱である。四十度と言

出鱈目で

平熱

へば、大熱であつた。それから思ひついて私は四十度と答へたのであつた。もしそれで熱すぎたら、その時は水をうめるまでの事だ、といふのがその時の私の肚であつた。

その後、毎朝フランスパン二つと三分の半熟卵二つと紅茶二杯とが、きちん／＼と私の部屋に運ばれ、風呂にはいつも四十度のお湯が沸かさされ、私は黙つて、その風呂にはいり、そのパンを喰ひつくし、その卵を喰ひつくし、その紅茶を飲みつくした。銀製の紅茶沸かしにはいつて来る紅茶は、紅茶茶碗にちやうど二杯分あつて、決して多すぎる事も、少すぎる事もなかつた。風呂の中には寒暖計がつけてあつて、その寒暖計は、いつも必ず四十度の所をさしてゐた。

それが初の内は、私に、妙に窮屈な、いやな感じを與へた。な

んだか、兵營か病院かにはいつてゐるやうで、勝手な時に勝手な事の出来ないもどかしさがあつた。しかし、それも段々馴れてくると、結句氣樂でいゝやうにも感じられ出した。紅茶がもつと飲みたければ、今日一日だけ我慢すれば、明日からは、もう一杯分餘計にしてもらへばよかつた。もう少し熱い風呂にはいりたければ、今日一日だけ我慢すれば、この次から、もう一度でも、もう二度でも、望み次第熱くしてもらふ事が出来た。日本にゐる時のやうに、一々に小言をいふ必要もなし、小言を言はれる方から言つても、そのたびに一々まごつく必要もなかつた。——勿論、人間の事だから、細かな所は決して數字などで現す事の出来るものではなつた。従つて、數字に頼る事になれば、結局いゝ加減な所でお互に妥協しなければなら

妥協する

らないのは、知れ切つた事であつた。それでも、このやり方では都合の可い事は、多少我慢する氣になりさへすれば、割に自分の希望に近い所まで、相手に具體的な標準を示す事が出来るといふ點であつた。

併し、そんな事よりももつと大事な事は、このやり方が非常に經濟的なやり方であるといふ事である。二杯しか飲まない紅茶の湯を、わざ／＼三杯分沸かすのは、紅茶も無駄になるし、お湯も無駄になる事である。四十度のお風呂にしかはいらない人間に、四十二度のお風呂を沸かすに至つては、ガスを無駄に使ふ事夥しいものである。——この細君が私に先づ、紅茶を何杯めしあがると訊き、何度のお風呂にはいるかと訊いたのも、結局、初からそれを承知して置いて、一度でも無駄な力

を使ふまいとする、深い用意から來たものに違ひなかつた。

ある朝湯殿から歸りに、臺所の横を通り抜けたら、この細君が、私のための朝飯の用意をしてゐた。見るともなくその方を見ると、細君は、一方ではガスの火でお湯を沸かしながら、一方では紅茶を頻りに秤にかけてゐるのである。——私は又しても驚かされた。妻君は恐らく、紅茶茶碗一杯の紅茶を入れるには、お湯が何度の熱さに沸き、紅茶の分量が何分何分あればちやうど好い味が出るといふ事を心得てゐて、それを標準に、湯を沸かし、紅茶を秤にかけ、さうして、それを毎朝、私の部屋まで運んで来てくれてゐるのであらう。是は、無駄を省くといふ點から言へば、正に一番合理的な方法であつた。同時にまた是は、その材料を十分に使ひ切るといふ點から言つて

合理的な

能率的

も、一番能率的な、——従つて一番經濟的な方法であつた。——出来るだけ無駄な事をするのでなければ、自由を享樂してゐるやうな氣のしない我々日本人からいふと、是は餘りにも合理的でありすぎ、また餘りにも能率的でありすぎ、妙にこちこちしてゐて、人間らしくのび／＼した感じのない、いやなやり方であるとも、考へられない事ではない。併し、もしこのやり方が、日常些事の生活に於て徹底するのみならず、それで十分に鍛鍊された者が、それを更に、もつと大事な、精神生活に於て徹底させようとするならば、このやり方は、既にそれ自身恐るべき威力であり得る事は、説明するまでもない事である。あらゆる科學の進歩は、決して無駄な事をしまいとする所から生まれる。また、すべての材料を、出来るだけ能率的に——十

精神文化

分に使ひ切らうと努力する所から生まれる。是は極めて些細な日常生活上の出来事であるに過ぎなかつた。併し、ドイツの學問もしくはドイツの精神文化を特色づけて、最も著しく他國と區別するものは、實にこのやり方における徹底である。

是はドイツ人の國民性に根ざすものであるには違ひなかつた。併しドイツの婦人たちが、その日常生活に於て訓練された所のものを、自分たちの子供に、無意識有意識に吹込んでゐる事が、特にその國民性を一層力強く發達させてゐるに違ひない事も、亦否定する譯には行かない事である。

(黄 金 蟲)

黄金蟲

大正十四年(一九二五)から昭和八年(一九三三)にかけて書かれた著者の隨筆を集めたもの、昭和九年二月刊行。

和辻哲郎

兵庫縣の人、哲學者、文學博士、東京帝國大學教授、明治二十二年(一九四九)生。

規定
存在の仕方
共同態

一八 家

和 辻 哲 郎

人間の第一の規定は、個人にして社會的であること、即ち、間柄に於ける人であることである。従つて、その特殊な存在の仕方はまづこの間柄従つて共同態の作り方に現れてくる。人の「間柄」の最も手近なものは夫婦關係であり、従つて、親子關係である。而して、夫婦は子に對して父母となると共に、夫婦自身が親に對して子である。だから、人は男女であると共に夫婦であり、親であり、子であるのである。子としての役目を持つたことのない男女なるものは、絶對的にあり得ない。従つて、男女の間はあくまでも、夫婦親子の間に基づくといはねばならぬ。これが家族としての人間の共同態である。

全體性
家長
恣意
歴史的に

後裔
成員

淳風美俗
力説する

「家」は家族の全體性を意味する。それは家長に於て代表せられるが、併し、それは家長を家長たらしめる全體性であつて、逆に家長の恣意により存在せしめられるのではない。特に家の本質的特徴は、この全體性が歴史的に成立してゐるといふ點である。現在の家族はこの歴史的な家を擔つてゐるのであり、従つて、過去未來に互る家の全體性に對し責任を負はねばならぬ。故に、家に屬する人は親子夫婦であるのみならず、更に祖先に對する後裔であり、後裔に對する祖先である。家族の全體性が個々の成員よりも先であることは、この家に於てよく明示されてゐる。このやうな家が、日本の人間の存在の仕方として特に目立つものであることは、家族制度が日本の淳風美俗として力説せられることによつても知られる。

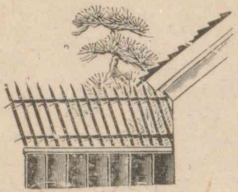
日常的な
把捉する

最も日常的な現象として、日本人は家を「うち」として把捉してゐる。家の外の世間が「そと」である。さうして、その「うち」に於ては個人の區別は消滅する。妻にとつては夫は「うち」「うちの」人「宅」であり、夫にとつて妻は「家内」である。家族も亦「うちの」者「であつて、外の者との區別は顯著であるが、内部の區別は無視せられる。即ち「うち」としてはまさに距なき間柄としての家族の全體性が把捉せられ、それが「そと」なる世間と距てられるのである。このやうな「うち」と「そと」の區別は、ヨーロッパの言語には見出すことが出来ない。室の内外、家の内外といふことはあつても、家族の間柄の内外をいふことはない。日本語のうち、そとに對應するほど重大な意味を持つのは、第一に個人の心の内と外とであり、第二に家屋の内外であり、第三に

國或は町の内外である。即ち精神と肉體、人生と自然及び大きい人間の共同態の對立が主として注意せられるのであつて、家族の間柄を標準とする見方はそこには存せぬ。かくて、うちそとの用法は日本の人間の存在の仕方の直接の理解を表現してゐるといつてよい。

かく言語に表現せられてゐることは、同時に家の構造にも現されてゐる。即ち、人間の間柄としての家の構造は、そのまま家屋としての家の構造に反映してゐるのである。先づ第一に「家はその内部に於て「距なき結合」を表現する。どの部屋も距の意志の表現としての錠前や締によつて他から區別せらるゝことがない。即ち、個々の部屋の區別は消滅してゐる。たとひ襖や障子で仕切されてゐるとしても、それはたゞ相互

截然

恬淡な
逆茂木

の信頼に於て仕切られるのみであつて、それを開けることを拒む意志は現されて居らぬ。だから、距なき結合そのものが襖・障子による仕切を可能にするのである。しかし、距なき結合に於て、しかも仕切を必要とするといふことが、他方では距なき結合の含んでゐる激情性を現してゐるのである。従つて、それは家の内部に於ける對抗性を示すと共に、またそれを悉く取拂つて一切の仕切のない恬淡な開放性をも實現することが出来る。第二に、家はそとに對して明白に區別せられる。部屋には締をつけなくても、外に對しては必ず戸締をつける。のみならず、その外には更に垣根があり、塀があり、甚だしい時には逆茂木や濠がある。そこから歸れば玄關に於て下駄や靴をぬぎ、それによつて外と内とを截然區別する。

そとに對する距が露骨に現れてゐるのである。かくの如き家が日本に於ては依然として存續してゐる。さうして、單に外形的にのみならず、生活の仕方をも規定してゐるのである。それが人間の存在の仕方としていかに特殊的であるかは、ヨーロッパのそれと比較することによつて明らかになる。ヨーロッパの家の内部は個々獨立の部屋に區切られ、その間は厚い壁と頑丈な戸とによつて距てられてゐる。その戸は一々精巧な錠前によつて締ることが出來、從つて、たゞ鍵を持つもののみが自由に出入し得るのである。これは原理的にいつて個々相距てる構造といはねばならぬ。内外が第一に個人の心の内外を意味することは、家の構造に反映して、個別的な部屋の内外となるのである。だから、部屋

レストラン

「料理店」の意、フランス語。

オペラ

「歌劇」の意、イタリア語。

の戸口から出ることとは丁度日本に於て玄關から出ることと同様な意味を持つ。室の中では、即ち個人的には眞裸でもよい。しかし、室を出て家族の間に加るときには、きちんとしてゐなくてはならぬ。一步室を出れば、家庭内の食堂であると、街のレストランであると大差はない。即ち、家庭内の食堂がすでに日本の意味に於ける「そと」であると共に、レストランやオペラなどもいはば茶の間や居間の役目をつとめるのである。だから、一方では日本の家に當るものが戸締をする個人の部屋にまで縮小せられると共に、他方では日本の家庭内の團欒に當るものが町全體にひろがつて行く。そこには距なき間柄ではなくして距ある個人の間の社交が行はれる。しかし、それは部屋に對してこそ外であつても、共同生活の意味

個人主義

に於ては内である。町の公園も往來も内である。そこで日本
本の家や塀や垣根に當るものが、一方で部屋の前までに縮
小したと共に、他方で町の城壁や濠にまで擴大する。日本の
玄關に當るものは町の城門である。だから部屋と城壁との
中間に存する家はさほど重大な意味を持たない。人は極め
て個人主義的であり、従つて、距があると共に、また極めて社交
的であり、従つて、距に於ける共同に慣れてゐる。即ち、まさし
く家に規定せられるといふことがないのである。

日本人は外形的にはヨーロッパの生活を學んだかも知れ
ない。併し、家に規定せられ、個人主義的・社交的なる公共生活
を營み得ない點に於ては、殆ど全くヨーロッパ化してゐない
といつてよい。路面にアスファルトを敷いても、それが足袋

アスファルト
アスファルト・コ
ンクリートの略、
アスファルトを泥
狀に溶し、砂利・
碎石を混入して道
路舗装に用ひる。

祖先神

はだして出て行ける場所であると誰が感ずるであらうか。
或は、また靴のまゝで疊の上にも上あがれると誰が感ずるであら
うか。即ち、家の内と町の内との同視がどこに存するのであ
らうか。町をあくまでも家の外として感ずる限り、それはヨ
ロッパ的ではないのである。解放的な日本の家屋に住得
る限り、彼等は依然として家に規定せられてゐるのである。
かくして、我々は、家としての存在の仕方が特に顯著に國民
の特殊性を示すことを承認しなくてはならぬ。ところで、日
本の人間がその全體性を自覺する道も、實は家の全體性を通
じてなされたのである。人間の全體性は先づ神として把握
せられた。しかし、その神は歴史的なる家の全體性としての
祖先神に他ならなかつた。それは古代に於ける最も素樸的

素樸な

尊皇攘夷

氏神

原始社會

風土 (人間學的考察)

大學に於ける講義の草案を基礎として、人間存在の構造契機としての風土性を明らかにしたものの、昭和十年(二五年)九月刊行。

な全體性の把捉であるが、しかし、不思議にもその素樸な活力が千何百年かを通じて生き續けてゐるのである。明治維新は尊皇攘夷といふ形に現された國民的自覺によつて行はれたが、この國民的自覺は日本を神國とする神話の精神の復興にもとづき、この復興は氏神の氏神たる伊勢の神宮の崇拜に根ざして居る。原始社會に於ける宗教的な全體性的把捉が、千何百年の後に、なほ社會改革の動力となり得た、といふやうな現象は、實際、世界に類がないのである。我が國に於ける國民の全體性は、同一祖先より出づるこの大きな家の全體性に他ならない。そこで國民は家の家となる。家の圍の垣根は國境にまで擴大せられる。家の内部に於けると同じく、國民の内部に於ても距なき結合が實現せられねばならぬ。(風 土)

藤村 作

静岡縣の人、國文學者、文學博士、明治八年(三三)誕生。

一九 婦人の教養としての國文學

藤村

作

一

文學は人間の記録であるから、その中には人間生活に關する各般の知識がある、暗示がある、教訓がある、慰藉がある。文學は人間の偽らざる影像であるから、その中には人間の赤裸裸なる相がある、人間性の眞實がある。随つて、それから來る反省教訓のいろいろがある。

しかし、物にはすべてその利のあるところには弊があり、功には又罪が伴ふことが多い。文學の利と功とを見る人は、同時に、その弊と罪とを考へることが必要である。世には文學を愛好し、尊重するあまりに、その社會への、人間への惡影響

を忘れてゐる人もあるが、かゝる人は文學を知らず、その弊害のみを見て、一概にこれを輕蔑し、排斥しようとする人とともに、謬りたる人である。我々は愛好するものに溺れず、愛好せざるものを毛嫌せずして、公平な判断をあやまつてはならない。

文學には、小説・劇・日記・文學・詩歌いろ／＼な形態があるが、そのいづれの形態に屬するを問はず、人間に關し、人間生活に關して、多量の知識を含むものである。それで、これに接し、これを鑑賞することになれた人々は、不知不識の間に、それから多量の知識を得て、おのづから人生に關する理解を廣め、深めてゐる。文學は時代の反映であり、時代生活の寫眞であるが、一見我々自身の生活とはまるで無關係であるかの如く見ゆる

毛嫌する

凌駕する

古典文學からさへ、我々は我々の靈を培ふべき尊い知識を得、又、相をかへて現代の生活に新しく生かすべき知識を得ることが少くない。況や現代の文學から得るものは實に豊富であるのである。人々にはそれ／＼の特殊な職務・職業・環境があるから、随つて、我々の直接の經驗・見聞に入得べきものには限界がある。我々の書き物を通して得る知識は、直接に事物に接して得る知識を遙に凌駕してゐる。而して、この書物の中、文學は主なるものの一であらねばならない。昔は小説のやうなものを作り物語と稱して、人間空想の所産で、人生に必要な知識を與へない娛樂の方便物のやうに考へてゐたが、かかる考の當否を論ずることは、今や恰も白晝に幽靈を持出さうとするに等しい愚である。

現實に對する不滿、理想に對する憧憬は、常に文學の内容を成す。さうして、文學は屢明日の生活への設となすものである。文學の中には現代に於ける幾多の缺陷の指摘されてゐると共に、これらの缺陷に對する解決の暗示を與へるものも多くある。結婚生活や、家庭生活や、社會生活を取扱つてゐる文學には、常にそれが指摘してゐる現代の缺陷に關して、知識を與へるものがあるばかりでなく、これらの問題の解決に關し、これらの缺陷の改善策に關して、種々なる暗示を與へることも多いのである。さうして、文學の内容としては、單に作者が直觀に依つて得た感想にとゞまるとしても、作家や詩人の優秀な直觀力から得られたこれらの斷片的な想が、時流の常識の上に高く位置するものであれば、時には學者の研究にヒ

直觀力
ヒント

「暗示」の意、英語

ントをあたへ、その思想體系をつくる動機ともなり得るのである。

文學には、人生の悲哀痛苦を示して、人生の重荷を一層感ぜしむるものもある。けれども亦、文學の描き、語りて示してくられる世界には、崇高、醇美、悠久なる世界もある。所謂極樂淨土があり、神の國があり、理想の社會がある。詩人の錦心繡腸を通して見せられる自然や人生、作家の卓拔な想像力を通して覗かせられる人生は、光明と崇高と清淨と純潔との充ちたものである。

錦心繡腸

かゝる文學は、窮屈な拘束の充ちた社會の生活、悲哀苦痛の多い人生から、暫くの休養を得んとし、様々な娛樂を求め、慰藉を求めてゐる人々に、清い慰藉を與へ、高い理想を與へるもの

である。

以上述べた所のものを人間としての情操の教養と纏めて見てもよい。さうすれば、「婦人」としての局限された方面はどうかであらう。人間としての教養に特に「婦人」としての限界を與へらるれば、一層情操教養の必要を感じることが切である。婦人も人間である以上、人間教養の外に立つべき筈はないが、特に「婦人」といふことを考へる時には、結婚生活家庭生活といふことが先だつが故に、男子に比して一層豊かな情操の教養を積むの要を感じしめられる。潤なく、熱なき、干乾びた婦人を重要な成員とした家庭は悲惨である。殊にそれが主婦であつた場合を想像すれば、寒心すべきものがある。婦人と雖も國家社會的教養は大切である。けれども、文化社會婦人の最

成員
寒心す

舅姑

も重要な活動は寧ろ家庭に在らう。舅姑の最も勝れた保護者であり、夫の最も良い伴侶であり、而して、子弟雇人の最も優れた教育者であるべき主婦の教養としては、それにもましたものは家庭的の教養である。さうして、家庭的教養としては家事裁縫に止つてはならない。すべての家事の煩瑣な事柄の運用の基礎ともなり、又あらゆる家庭人との間の油ともなるものは、教養された情操であらねばならない。高い、清い、明るい、暖い情操であらねばならない。この意味で、文學に依る情操の教養は、「婦人」としての限界を附する場合に、特に強調されるべきである。

二

文學は人間生活の記録であり、人間の記録であるから、人間

的教養に有益であること、上に述べた通りであるが、又、世界のあらゆる人間は、或民族なり、或國民なりであることなくしては人間であり得ないから、文化國を飾つてゐる文學は、その國民性、國民精神の表現でもある。随つて、教養の立場から見れば、文學は國民教養の上にも亦有益なものといはねばならない。日本民族であり、日本國民である我々は、日本民族、日本國民であることなしには人間であり得ない。苟も日本民族の血を傳へてゐるものであれば、日本的な生活を營み、日本の環境に圍まれ、日本的な教育を受けてゐる。その一つでも持つものであれば、その生活に日本の特徴を持つことを拒み得るものはあるまい。感じ、思ひ、行ふことの上に、日本的な特徴なしには生きることが出来ないのである。かくして、國

文學はどんなものでも、人間記録であると共に、又、日本國民の感じ、思ひ、行ふたことの記録に外ならない。即ち、日本國民の生活記録である。

日本國民の生活記録であることを通して、人間生活の記録であるところの國文學は、我々日本人の國民的教養、又、人間的教養上、最も貴重なるものの一であるが、かく教養を二面に分けて考へるものの、究竟は一となるべきものである。日本人としての本質的なるもの、日本精神の精髓は、決して世界に孤立したものであるのではなく、あらゆる人間の上に擴充さるべき普遍性を持つものであるに相違ない。我々は外國文學に依つても人間的教養を得ることが出来るが、なほ我々の生命の糧としては、國文學の上に、一層適切なものを持つてゐる。恰も我

機構

榮養—營養

我が西洋流の肉食をなして生きて行けるが、それよりは永い傳統を有する日本流の魚菜食を改善して行く方が、一層我々の肉體の榮養に適してゐるとされるやうなものである。消化も易く、又、身體の機構の或部に故障をなすやうなことなしに、榮養たる職能を十分になすことが出来る。簡明にいへば、容易に血や肉や骨などになることが出来るのである。日本文學に表れた精神は、我々日本人の感じ、思ひ、又、これを行ふ上に容易であつて、又、自己の内外に故障を起すやうなことのないものであるといひ得る。即ち、穩健な、着實な精神の榮養たり得るものである。併し、こゝに注意すべきは、同様な魚菜食でも、古今時代を異にするに従つて、その調理の上には色々の變遷のあつたやうに、形を變へ、調味料を變へて、これをその時

代の人々に適するやうに工夫するやうに、日本文學の精神も、古代のまゝに、之を我々の現代生活に取容れる事は適當でない。之を現代に新しく生かす事が必要である。それで、傳統的教養には常に現代的教養が車の兩輪の如く伴ふを要するのである。現代的教養のみに傾けば、根柢のない、輕浮な人間となる様に、又傳統的教養のみに傾けば、時代後れの、固陋な人間となるのである。

我々は現代を知るには、色々な機會、色々な學問、色々な機關を持ち、又、實行上にも之を要求されてゐる。我々は相當な現代に對する理解なしには、一日でも生きて行けるものでない。併し、傳統的なものは、自然に残存してゐるものでも、この滔々たる世界的大波のなかに在つては、動もすると、次第に遺亡さ

涵養する

れようとしてゐる。現に眠りかけてゐるものでも、よく考へれば、我々に取つて非常に必要なものもあるから、これらはこれを自覺的に呼覺して、益涵養して行くやうにせねばならぬ。これを呼覺し、これを涵養する道は、唯これを抽象し説明するだけでは足るものではない。これに親しみ、これを會得して、自然に我が身に附けるといふ方法が伴はなければならぬ。否、それを主としなければならぬ。これには文學藝術に勝るものはないのである。

上代文學に表れた「まこと」の精神、そのいろ／＼な現れにしても、これを萬葉の歌などで讀む時、これに多大の愛着を感じ、憧憬をおぼえ、尊敬の念を持つて、自らなる精神の亢奮を禁ずることは出来ない。かゝる精神は我々に取つて必要な精神

神にしませば

大君は神にしませば天雲の、五百重が下に隠りたまひぬ（おきまのつしまひとぬ）置始東人（おきまのつしまひとぬ）一萬葉集卷二（おきまのつしまひとぬ）その他「神にしませば」の語を含む歌は萬葉集に多い。
へにこそ死なぬ
海行かば水漬く屍
山行かば草生す屍
大君の邊にこそ死なぬ（おきまのつしまひとぬ）願みはせじ。
一萬葉集卷十八、大伴家持の長歌の一節

であるばかりでなく、何處に押出しても立派な精神であることは、今更いふまでもない。「神にしませば」とか「へにこそ死なぬ」とかの歌に表れた忠の「まこと」は、永劫に失ふべからざる、我々の寶であるばかりでなく、如何なる民族、國民でも仰ぐべきものである。

中古文學に表れた「物のあはれ」の精神も、そのまゝには生活の相の非常に違つてゐる我々には不適當であるが、我々の全生活の中に、かゝる知情意の優しく調和した一面を持つことを誰が拒むだらう。猛きばかりが武夫でないと考へたやうに、かゝる優しい一面があつてこそ、日本精神は尊く、日本國民性は誇らしいではあるまいか。

近古文學に表れた武士道精神は、相は異なつてゐるが、上古

むらさき

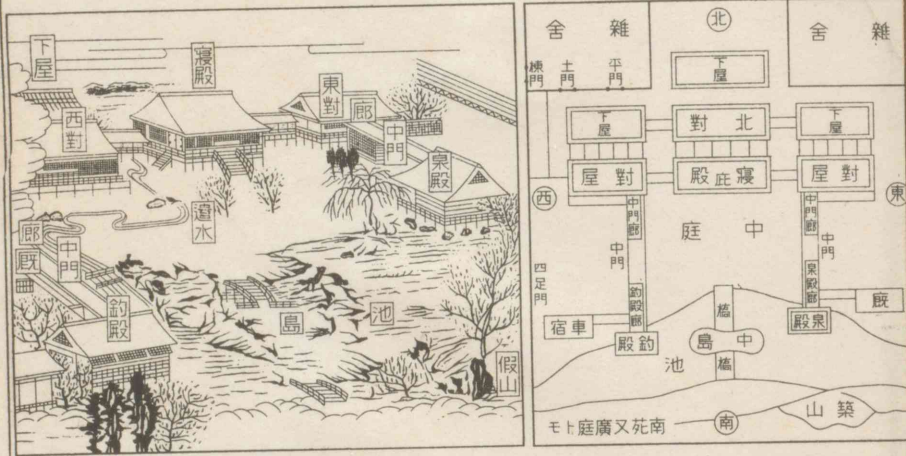
婦人の趣味と教養とを目的とした文學雜誌、昭和九年（一九三四年）五月創刊。

女子新國語讀本 新制版 卷九終

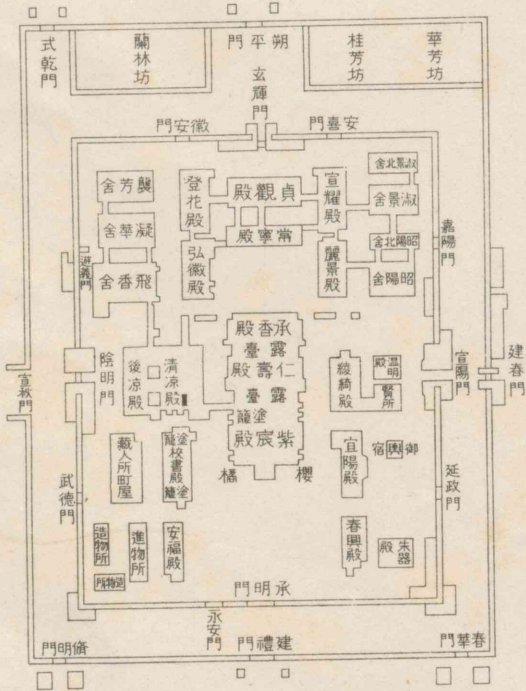
中古の精神の内容を複雑にし、深くして、これを武士時代に適應せしめたものである。近世文學に表れた、義理を尊重する精神、人情に生きる精神も、亦これを現代に適用しても、よく我がの社會生活を圓滑にすべきものではあるまいか。法律や理窟に生きる傾向の甚だしい今日に於て、義理と人情の調和を目ざした、即ち、社會規範と人間愛とを協和させようとした生活は、これを排斥すべき理由は見出されない。

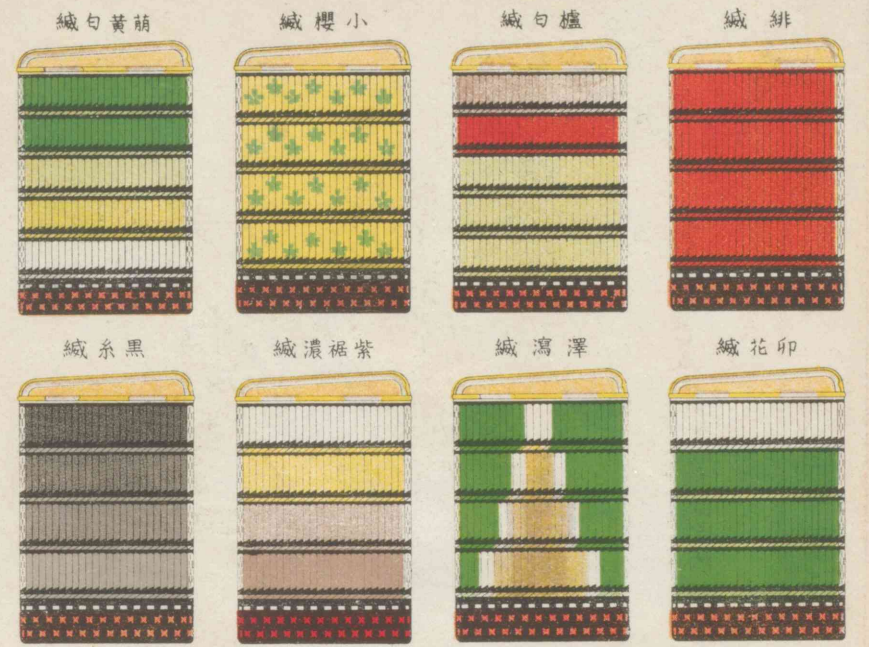
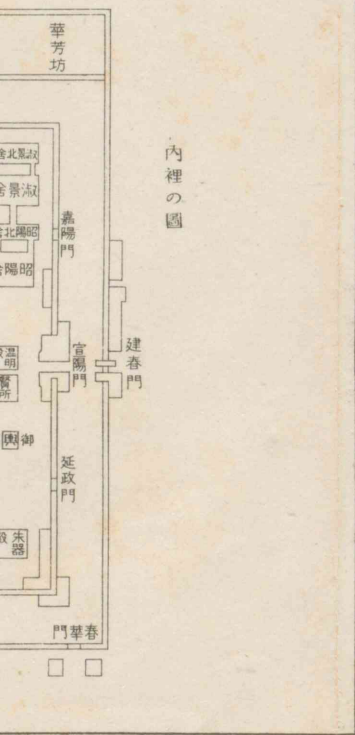
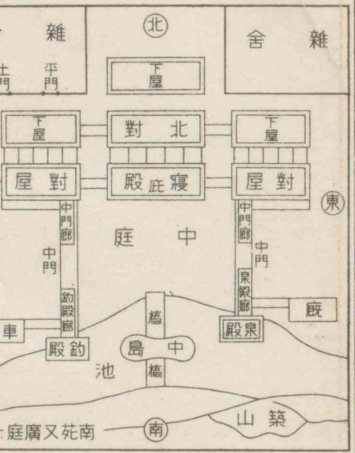
要するに、國文學の教養は、傳統的精神の教養に重きを置かるべきであるが、國民的教養は傳統的精神の教養の外に、現代的教養を必要とするが爲に、それと調和を保たしめ、これを現代にかす所に、その意義があるのである。（「むらさき」第一卷第一號及び第二號）

寢殿造

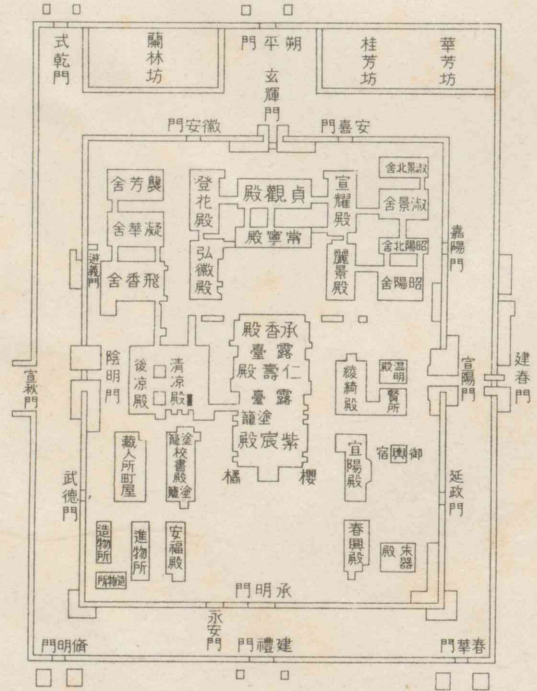
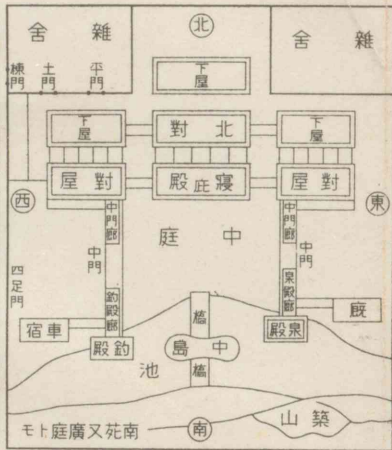
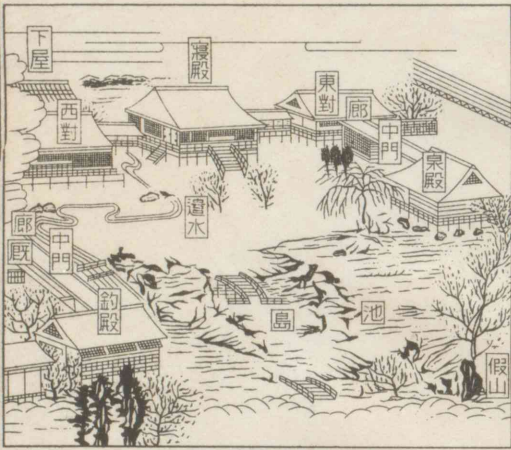


内裡の圖

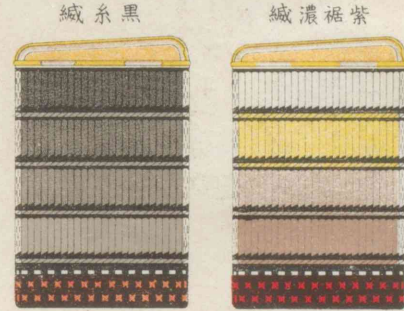
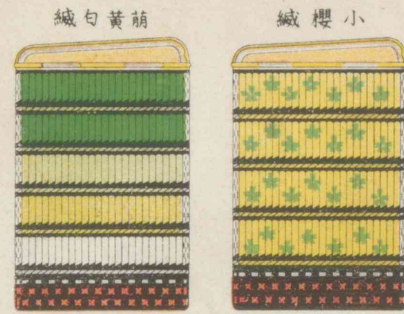




寢殿造



内裡の圖



文部省檢定濟

用科語國校學女等高 日十三月七年六十和昭

昭和十二年八月五日發行
 昭和十二年八月十五日發行
 昭和十三年一月二十七日發行
 昭和十三年一月二十七日發行
 昭和十六年七月十二日發行
 昭和十六年七月十二日發行



發行所

東京市神田區神保町一丁目二十五番地
 振替口座東京二六四四番
 大阪市東區博愛町五丁目五十六番地
 振替口座大阪四七一番

編者
 發行者
 發行者
 印刷者

女子新國語讀本 新制版

定價各金六拾錢

澤瀉久孝
 木枝增一
 東京市神田區神保町一丁目二十五番地
 會社名 東京文館
 代表者 鈴木金之助
 大阪市東區博愛町五丁目五十六番地
 會社名 交進社印刷所
 代表者 鈴木常松
 大阪市西區阿波座中通三丁目二三番地
 會社名 交進社印刷所
 代表社員 余部留吉

東京文館
 修文館

